
幼馴染との恋は無理ですか？

日向莉子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幼馴染との恋は無理ですか？

【Nコード】

N7607X

【作者名】

日向莉子

【あらすじ】

高校1年生になった石川雪と雪の幼馴染、松田隆矢が繰り広げていくラブストーリー。雪は隆矢に好きな人を作ってあげようという野望を抱いていく。だがそんな雪の野望を邪魔するものが……。そして、自分のために一生懸命になる雪を好きになっていく隆矢。隆矢の思いは届くのだろうか・・・

第1話 高校生になりました

私は、市内の学校に通う高校一年生の石川雪^{いしかわゆき}。私には、私の隣に住んでいる幼馴染がいます。性別は男で身長は180センチメートルという意外と大男。名前は・・・

「まつだりゆうや
松田隆矢」

「はい！」

隆矢は、新入生の代表として新入生からの一言を話すことになっていた。

私の幼馴染の隆矢は、小さい頃からとても元気な子で、周りからとても親しまれていた。

隆矢はクラス・・・学校の多々が知っているくらい有名だった。

そんな隆矢の幼馴染の私も、もちろん隆矢のせいで名前が少々知られていた。他のクラスの女子達から隆矢のことをいろいろ聞かれたりもした。

一番良く聞かれたのは“石川さんって隆^{りゅう}と付き合ってるんですか？”だ（隆矢はニツケネームとして皆から“隆^{りゅう}”と呼ばれている）。

という質問に私は即答で“付き合ってるわけじゃないじゃん”と答え続けてきて、もう16年（まだ16歳になってないけど）。

そして私の新しい高校生活はスタートした。

「おーい、ゆきー」

「あ、隆矢。演説というか・・・まあ、上手に話せてたね！隆矢にしては、あははは」

そんな話をしながら、私と隆矢は指定された教室に向かった。

私と隆矢はクラスが一緒だった。ちなみに小学生の時からずっと一緒のクラスだった。

担任の先生が生徒が着席したことを確認し、教卓の前に立った。

「起立、礼」

「お願いします」

「着席」

いつも通りの流れだった。中学の時と何ら変わらない高校生活になるだろうと思った。

「えーっと、貴方達の担任をすることになった、西口小枝子にしぐちえいこよ。ニッシーって呼んでね！」

「よろしく、ニッシー！」と隆矢。

この時私は、さすが隆矢だなと思った。中学の時もそうだった。隆矢が突っ走ってリーダーのような存在になっていた。いつの間にか隆矢のペースに乗っていつていた。

「さーて、ホームルームということで、自己紹介をしましょう！でわでわ、その貴方から！」

そして自己紹介タイムが始まった。恒例行事のようだ。

次々に生徒達が自己紹介をしていく。

「えー、俺の名前は松田隆矢。みんなから隆って呼ばれてて・・・まあ、どうしても呼びなさい！」

「あははは、やっぱ隆おもれー」「個性的なキャラだねー」「よろしくー、仲良くしようねー」とクラスメイト。

次は、私が・・・

「私の名前は、石川雪です。みんなと仲良くしたいので、いっぱい話しましょう！よろしく！」

中学の時と変わらないフリーズ。自己紹介ってなぜか面倒くさい気がする。

全員の自己紹介が終わり、ちょうどホームルームの終わりが近づいていた。

「でーは、終わりますか！というか、次桜の前で記念撮影撮りますよ！校庭に集合！」

そして、チャイムが鳴り、号令が掛かった。

さっそく、いろんな人が隆矢の前に集まっていた。

「石川さん！」

「は、はい」

いきなり名前を呼ばれ、驚く私。見たことない顔の子だった。

「私たちと友達になってください！」

「・・・あははは、もちろん！深刻な顔だったから何かと思っちゃった」

「ええ、そんな深刻だったかな・・・、でもよかった！雪って呼んでいいかな？」

「うん」

そうして、新しい友達ができた。ボブヘアの倉梨莉奈。くらなしりな“リナポン”というニックネームで呼ぶことにした。

「ねえ、ゆ、雪」

「ん？どうしたの？」

まだ私の名前をぎこちなく呼ぶリナポン。

「雪と松田君って付き合ってるの？」

キ、ギター！聞かれるとは思ったが、こんなに早く・・・。

「いやいや付き合ってないよ、どうして？」

「だってさ、さっきすごい仲良さそうに話してたからさ・・・」

「あー、私と隆矢は幼馴染なの。隣の家の子馴染みたいなの？」

「そーなんだ！だからか」

リナポンはなるほどと言わんばかりに頷いていた。

私たちのクラス（１年Ｃ組）は、先生が言っていたように記念撮影をするため校舎に出た。

「ほらほらちゃんと並んで！」

ここはやっぱり背の順。私は１５４センチメートル、小さい方だ。

それに比べて隆矢は一番最後。私と正反対だ。

「撮りますよー」

そして、カメラのシャッターを切る音が校舎に鳴り響いた。

３枚くらい撮り、記念撮影は終了。そしてこれで下校。入学式の下校は早い。

「ゆきー、帰ろう！」

「うん！まあ、途中までだけ」

「雪は家どこ？」

「えっと、駅の近くかな・・・リナポンは電車乗って帰るんだよね！駅まで送るよ」

そうして、私とリナポンは一緒に下校した。

リナポンの家は電車に乗って3つ目の駅。

あつという間に駅についてしまった。今日はいろいろ話題がたくさんあった。

「じゃあ、また明日ね！」

「うん、あ！リナポン！明日8時にここで待ってる！一緒に行こうね！」

そういうとリナポンは、半泣きになっていた。

「え！？だ、だめだった？ご、ごめんね」

「いや、わ、私・・・めっちゃ嬉しいです！雪様！」

ゆ、雪様！？

やっぱり友達がいるって楽しくて幸せなことだ。

こんなことで喜んでくれるなんて・・・。

「じゃあ、また明日！」

そういつて私とリナポンは背を向けて家に帰っていった。

すると前方から隆矢の姿が見えた。

「あ、隆矢」

「おう、雪！おつかえり〜」

小中学生とこの件くだりをしてきたけど、さすがに飽きてくる。

「意外と学校から近くてよかったよね」

「まあ、これってエスカレーター式っていうんだっけ？便利だよなー」

「エスカレーター式ね・・・そういえば、隆矢、高校生になったんだから彼女作るんでしょ？」

単刀直入に聞きすぎたのか、いきなり隆矢の顔が困り果てた。

「んー・・・俺、彼女作らないことにした・・・」

隆矢はもてる。女には困らない。それに意外とイケメン？私が言うのもなんですが・・・。

「どうして作んないの？」

「まあ、いろいろあんだよ！男には！じゃあな」

そういつて隆矢は逃げるかのように家に入ってしまった。

中学の時も隆矢は同じことを言った。

私には理解が出来ない。いい女は寄って集ってくるのにどうして好きな人すらできないのだろうか。

私はそんな隆矢に絶対好きな人を作らせて見せると自分に誓った。

第2話 宿泊研修1

朝の8時。

私は高校で出来た友達、リナポンと一緒に学校へ登校していた。

「あ、ゆーきー！おはよう」

「おはよう、リナポン」

入学式の次の日からずっと私とリナポンは登校していた。

そうしているうちにリナポンは私と気軽に話せるようになっていた。

「そういえばさ、あと少いで宿泊研修だよー！」

「あー、そういえばだね・・・でもさ、あれ自分達でご飯作ったりするんだよね？」

「うん、そうだよ」

自分でご飯を作る・・・。

私はもう高校生になったというのに未だにまともな料理を作ったことがない。

中学生の時の家庭科は班員全員が私にいろんなことを教えてくれたからまだマシな料理を作れていたが・・・。高校生になっても料理の一つや二つも作れないなんて・・・、それに私は女の子なのに。

「それにさ、これをきっかけに話したことない人とかと話せるチャンスだし！」

そうだ。これをきっかけに好きな人も・・・。

私は隆矢のために隆矢の好みっぽい人をこの宿泊研修で見つけて見せると自分に宣言した。

学校に着いた私たちは靴を履き替えていた。

「あ、松田君と宮口君！おはよう」

隆矢は入学式の日みやくちたくみに宮口拓海という友達を作っていた。

「はよ、あー、雪もいたんだ・・・小さくて見えねーぞ」

「うっさい！宮口君おはよー、こんなやつと絡んでたら頭やられち

やうから気をつけてね」

そういうとリナポンと宮口君は、私と隆矢の口喧嘩を見て笑っていた。

こつという喧嘩は日常的だ。毎日しているといつても過言ではなかった。

私たちは教室に入ろうとした。隆矢が戸を開けようとすると、先に戸が開き、誰かが隆矢とぶつかった。

「うお」

隆矢は驚きの声を出した。ぶつかってきたのはクラスの女子、川本^{かわも}知恵^{とちえ}。

「ご、ご、ごめんなさい!」

「いや、別にいいけど・・・大丈夫?」

「は、はい! す、すみませんでした!」

そういうと彼女は走ってどこかへ去っていつてしまった。

私の目がおかしくなければ、知恵の顔はとても赤くなっていた。もしかすると知恵は隆矢のことが・・・?

私たちはそれぞれの席に座った。そして私は前の席の隆矢の肩をトントンと叩いた。

「・・・なんだよ」

「いや、やっぱり隆矢は乙女心が分からないのか・・・って思っ
て! ねえ、今度宿泊研修あるじゃん。その時にさ、隆矢彼女作ったら?」

「・・・は? お前、頭大丈夫? ってか昨日の聞いた? 俺、彼女は作
んないって言ったんですけど」

「だから?」

「だ、だからじゃねーよ、まあ男にはいろいろあんだって!」

そういうと隆矢は席を立ち、宮口君のところへ向かった。

私にも男心が分からないように隆矢も乙女心が分からないのはわかる。だけど彼女を作らない理由がわからない。高校受かったあの時、隆矢は確かに『高校生になったら絶対彼女作ってやる』って宣言し

ていたのだが……。そんな急に心が変わるとは思えない。

そして、チャイムがなった。

先生が教室に入り、教卓の前に立った。

「きりーつ、礼」

そして、今日の日が始まった。

私は今日の一日、ずっと隆矢のタイプを想像していた。

古文を読んでいるときも、体育をしているときも、理科の勉強をしている時も……。ずっと！そして今、宿泊研修の話をしている時も！

「……それでは実行委員を決めたいと思います」

ついに宿泊研修の係決めをする時間になった。

「はいはい、俺、隆……。じゃなくて松田君を推薦しまーす！」

「は！？てめっ」

「でわ、松田君でいいと思う人拍手」

そして誰もやる気はないので、みんな拍手した。もちろん私も拍手した。

「ちょ、何勝手に！拓海、後で覚えとけ〜！」

「あー、怖い怖い」

隆矢は面倒くさいと言っているが、本当は真面目にしている。

中学の時も三年の修学旅行の実行委員になったが、ちゃんとやり遂げていた。

「でわ次、副実行委員は……」

すると一人手が上がった。それは川本知恵だった。

「お、川本さん積極的でいいわね〜。では川本さんでいい人は拍手！」

もちろん皆拍手をする。そして拍手が鳴り止んだ後、周りの女子が知恵のことをニヤニヤしながら見ていた。私はこの時閃いた。もしかすると知恵は隆矢のことが好きかもしれないと……。朝も隆矢にぶつかって赤面になっていた。私は知恵に協力しようとして自分に宣

言した。

そう、この宿泊研修を利用して・・・。

「でわ、二人仕切ってちょうだい」

そして隆矢と知恵が教卓の前に出た。

係はどんどん決まっていき、私はなぜか料理をする係になっていた。

「どうしよう、リナポン！わ、私・・・料理できないよ」

「大丈夫だって！私も同じ班だから手伝うよ！」

「ありがとー」

リナポンがいなかったら私はきっと何もできないままだっただろう。それに私は過去にいろいろやらかしてきた。そう、こういう良く見慣れない街のところへ行くと必ず迷子になるのだ。そして何かと事件が起る。私がいるともしかすると迷惑が掛かるかもしれない・・・。だけど、今回もこんなことで引き下がってはならない！なぜなら、隆矢に好きな人を作らせると決めたから！そして知恵の恋が実るように協力しなければ！

私はホームルームが終わる頃にはポジティブになっていた。

チャームになり、一応宿泊研修の係決めは終わった。

「よし！リナポン帰ろう！」

「うん、なんか雪テンション上がってるね」

「うん！あのね・・・」

帰り道、私はリナポンに今回の作戦を全て話した。

「おお、雪すごいね・・・人思いなのはいいけど、雪は？」

「へ？」

「好きな人、作らないの？」

そつえばそうだ。そんなことを考えていなかった。隆矢と知恵のことで頭がいっぱいだった。

「んー、作る気ない・・・ってかステキな人がいない！」

「なるほどね」

そして、リナポンを改札口まで送り、私は家に帰った。家に帰るま

でずっと自分のことも考えながら隆矢と知恵のことを考えていた。

第3話 宿泊研修2

宿泊研修当日。

とうとうこの日がやってきました。私にとって不幸であり、ドキドキワクワクさせるイベントでもある。もしかすると隆矢と知恵が付き合うかもしれないのだから。

私は大きな荷物を肩に背負って家を出た。すると隣からも玄関が閉まる音がした。

「あ、隆矢！おっはよー」

「はよ・・・朝からなんでそんな元気いいんだよ」

「まあね〜」

私は隆矢に駆け寄った。

「今回、この宿泊研修で絶対隆矢は好きな人が出来る！私が宣言します！」

「は？お前バカ？ってかどけて、拓海が待ってるから」

そっいつて隆矢は私に背を向けて大股で学校へ向かっていった。

私もリナポンが待つ駅に向かった。

駅に着くと既にリナポンは着ていた。

「あ、雪ー！おはよう」

「おっはよー、この日を待ちに待っていたよ、うんうん」

私はテンションが上がり、独り言のようにペラペラと今日起りそうな出来事を話していた。

学校へ着くと既に大型バスが来ていた。

バスの周りにはたくさんの一年生が集まっていた。私とリナポンもその場へ駆け寄って行った。既に隆矢たちも着ていた。

集合時間がきて、クラスごとに並んだ。

「全員揃った？」

「一年C組はオツケーです」

実行委員の隆矢がクラスの人数を数えて担任に報告した。そして一

年C組はバスに乗り込んだ。

「でわ、出発しまーす！」

そしてバスは動き始めた。私はバスが嫌いだっただ。いや、車も嫌いだ。なぜかという酔ってしまふのだ。この揺れ、この独特な臭い。これだけで私は酔ってしまうのだ。

数分後・・・

「雪？大丈夫？酔った？」

「き、気持ち悪い・・・」

一番前の席に座らせて貰っているにも関わらず、もう酔ってしまった。もしこれで隣にリナポンがいなかったらと考えると　もし隣が見知らぬ人だったらと思うと、余計に気持ち悪くなる。

「ちよつと・・・寝るね」

「う、うん。着いたら起こすね」

そうして私は眠りに着いた。寝ていると酔っている感覚も無くなるのだ。

眠りに着いた私は、夢を見ていた。

料理が上手いかず、隆矢と知恵の恋も実らず、逆にもっと距離を開けてしまった。

「・・・き、ゆーきー、着いたよー」

すると夢から覚め、リナポンに呼び起こされた。

「あ、おはようリナポン」

時間を確認するとちょうど十一時だった。日程は、まだ高校入ったばかりなので校歌を歌い、覚えるのを今から行うことになっている。

「でわ、皆さんバスが着いたのでちゃっちゃと降りちゃってね」

そうして担任のニッシーが声を掛け、生徒達（一年C組の人達）はバスから降りた。

よく分からない建物が私たちの前に合った。でもまあ、これから校歌を歌うのだから広い部屋とかがあるのだろつと予想はついていた。もちろん広い部屋だった。宿泊研修で校歌を歌うなんてあんまり聞いたことが無い。それに宿泊研修なのに校歌を熱唱なんて恥ずか

し過ぎる。私はそう思った。

「でわでわ、歌集を取り出して校歌のページを出してください」

生徒が並んでいる前には、CDラジカセが置かれてあった。これで校歌のメロディーを流そうという魂胆であろう。そして先生は生徒全員が歌集を取り出したことを確認し、再生ボタンを押した。

すると予想通り、校歌のメロディーが流れた。

当たり前のように最初はみんな歌えるはずが無かった。入学式の時、一度だけ在校生が歌っていたあの時しか、この高校の校歌を聴いた事が無いのだ。先生はアホなのだろうか。

「はい、もう一度！」

そして何回か繰り返し歌っていると、十二時が来た。そろそろお昼の時間だ。十二時半にはここを出て次の目的場所へ行かなければならなかった。果たして、間に合うのだろうか。

「は、早くお弁当食べてバスへ乗り込むわよ！」

先生がこんな時間までやっているから余裕を持ってないのだ、と思う。生徒達は急いで弁当を平らげ、バスへ乗り込んだ。乗り込んだ時間は十二時三十三分。微妙に遅れてしまった。そしてバスは出発した。

「ニッシー、もうちょい計画的に行こうぜ！」

「そ、そうね・・・でも計画表通りに動いているんだけどね・・・」
まあ、確かに計画表通りに間違いない。ということはこれを計画した人がアホなのか。

そして次は講演を一時間ほど聞いた後、ついに野外炊事だ。

講演は一時からで、野外炊事は移動距離も含めて、二時半からとなっている。

「雪、やばい・・・眠たい・・・」

「わ、私もだよ・・・この講演眠りの呪文のようだよ・・・」
講演がして数分後。何人かの生徒が眠りにつき始めた。私もその中の一人である。

いつの間にか講演は終わっていた。

ほとんどの人が眠りに着いていて、バスの中で先生に叱られてしま

った。そしてついにきた野外炊事の時間ですね。

「はあああああゝ・・・」

「深い溜息だね。だ、大丈夫！私も手伝うからさ！」

「うん・・・リナポン大好き」

そういつて私はリナポンに抱き付いた。

まずは材料とそれぞれの班にまな板や包丁を用意しなければならない。準備がだいたい整い、ついについに食材を切るときが来た。

私は右手に包丁を持ち、食材を切っていく。

「雪、その持ち方だったら指切っちゃ・・・」

「ああああああ！指切ったー！」

人差し指をざっくり切ってしまった。幸いなことに人差し指が無くなるまではいかないが。人差し指の先っぽから血が溢れ出して来る。

「先生に絆創膏ばんそうこう貰いに行こう」

そういつて私はリナポンに連れられ、先生に絆創膏を貰いに行った。

「はい、これで大丈夫！」

「ありがとうございます・・・」

完全に私は落ち込んでいた。こんなことが起るのではないかと・・・。すると隆矢と知恵がこちらに駆け寄ってきた。なんだかラブラブのカップルに見えてくる。

「あれ、雪、どうしたんだ？あー・・・指切ったか。あ、ニッシー野外炊事の後の予定のことなんだけどさー・・・」

もちろん隆矢は私が料理を作れないことを知っている。すると私の視界に知恵の悲しそうな表情が映った。私は何をしているんだと思つた。知恵に協力するはずが、私が隆矢と話しているせいで変な誤解を招いているような気がする。

よし野外炊事るとき二人をなんとしてでも近くで食べさせないと。

「ねえねえ、隆矢と知恵」

「あ？何？」「何？雪ちゃん」

「ニッシー頼りないからさ、野外炊事の食べてる時、二人で計画立ててみたら？だから、二人きりで隣同士で座って、計画する・・・」

みたいな？」

すると知恵の顔がだんだんと赤面になっていくのが分かった。私の心は恋模様で染まっている。

「は？なんでそこ二人にこだわんだよ、川本が俺と二人で食べてたら気まずいだろ・・・」

そういつて隆矢が知恵の顔を見ると知恵は真っ赤な顔でもう林檎だった。隆矢は感ずいたのだろう。私が考えていたことが・・・。

「お前な・・・わかったよ、食べりゃいんだろ」

「べ、別に無理しなくていいよ。私と食べなくなったら食べなくていいから」

知恵が困り果てている顔をしているが、その後ろで私は隆矢に“断るな”というオーラを放った。

「いや、別に無理してない。ニッシー対策考えようぜ」

すると知恵の顔は笑顔になり、とっても可愛い笑顔だった。

そして、次々と時間は経っていった。

第4話 宿泊研修3

野外炊事が終わり、私たちは宿泊する場所へ向かった。

野外炊事では、計画通り隆矢と知恵は一緒にご飯を食べた。周りからはカップルのように見られ、隆矢は違うと皆に言い聞かせていたが、知恵はとても嬉しそうに見えて恥ずかしいように見えた。

そして部屋の注意事項のお知らせを聞かされていた。

「雪、一緒の部屋なんだけど・・・朝、先生のところにシート持っていくかなくちゃならないんだよね」。雪忙しいなら私行くけど・・・

「

「私いけるよ。リナポンは布団畳んでてくれるかな？」

「オッケー」

宿泊場の管理人の注意事項のお知らせが言い終わり、私達は各部屋へと移動した。

部屋は四人グループに分かれる事になっている。私のところは、リナポンと知恵、知恵の友達の咲、そして私の四人だった。

部屋の中に入ると意外に狭く、ベッドとベッドの間は一メートルくらいの隙間しかなかった。

「うわ・・・狭すぎ・・・」

さすが宿泊研修というものだ。そう甘くない。中学三年生の時に行った修学旅行のホテルと比べてしまった。もちろん修学旅行のホテルと比べ物にならないくらいボロくて狭い。

「本当に狭いね・・・まあ、温泉入って、寝るだけの少しの間だし・・・我慢だね・・・」

そういつてリナポンが一番最初に部屋に入り、電気を点け、辺りを見渡した。殺風景だった。ベッドと時計しかない。こんな部屋、住みたくない。

「じゃあ、温泉入りに行こっか。早く済ませたほうがいいし」

「そうだね、知恵達も行こうよ」

「うん」

そうして四人全員で温泉場に向かった。するとバツタリ隆矢達と合流した。女湯と男湯は隣同士にある。幸い、覗き見されることはない。

「あ、川本、さっきはサンキューな」

「え、あ、いえいえ」

野外炊事で二人と一緒に食べていたことを一年C組の人は皆知っている。だから、私達は空気を読むため、先に温泉に入ることにした。そう、あの二人を二人きりにするために・・・。

「ねえねえ、やっぱりあの二人いい感じになったよねー」と咲。

「うんうん、あのままくつついちゃえばいいのにね」

そう私が言くと、リナポンの眉が一瞬ハの字になった。

「リナポンどうかした？」

「ん？ううん、なんでもない」

そういつてリナポンはにっこりと笑った。

後から知恵が赤面になって、風呂場へやってきた。

どんな話をしたのか、知恵からいっぱい話を聞いた。

部屋に戻ってから恋バナが止むことは無く、先生に注意を受け、私達は就寝した。

翌日。今日は自然を感じに森林へ行くこととなっていた。昼食を食べた後、ピクニックに行くような気分だった。その場所には、自然公園という名前が付けられていた。入る前に先生から注意事項を言われ、私達は並んで自然を鑑賞していた。

「でわ、ここからは自由行動とします。地図を見ながら、迷子にならないように行動しましょう」

そうして、自由行動となった。予め地図を渡されており、それを見ながらルートを歩いていった。

私はリナポンと一緒に自然公園を歩いた。自然公園は山みたいなも

ので、道幅が少し広いといったくらいだった。周りは緑ばかりだが、天然記念物などの看板などが所々置いてあった。

「あ、雪！見てみて！これも天然記念物だって！」

「ほんとだー」

リナポンは天然記念物に興味津々だった。私は自然の空気をいっぱい吸うことが精一杯だった。

「雪、あれ・・・松田君達だよ、やっぱあの二人・・・付き合い始めたのかな？」

「え？」

リナポンが指差したところには、隆矢と知恵が二人きりで歩いているところだった。もう付き合うまでにこぎ付けたのかなど思いながら、私とリナポンは二人を観察し始めた。

「なんだか、ワクワクするね！尾行してるみたい」

「あ、リナポン！あれ見て！」

そういいながら私達は二人を尾行し続けた。

帰りのバスに乗り込んだのは五時過ぎだった。

宿泊研修の最後は、隆矢と知恵の尾行で終わった。

帰りのバスは皆ぐっすりと寝ていた。私もいつの間にか眠りについていた。

バスが学校についたのは七時だった。外は真っ暗で肌寒い。

「一人で帰らないこと！不審者が来たら叫んで逃げるのよ！」

「ニッシー心配性だな、大丈夫だって！」

「男達はどうでもいいのよ！女の子の皆は気をつけてね」

そうして、一年C組は解散した。私はいつも通りリナポンを駅まで送ることにした。

「リナポン、帰ろう！」

「うん、でも雪、一人になっちゃうよ？それに駅まで来てもらっちゃったら遠回りに・・・」

「大丈夫だつて！駅からすぐだし、このくらい平気だよ」

リナポンは心配そうな顔をしたが、私は結局リナポンを駅まで送った。リナポンが電車に乗るまで見送り、私は駅から家に向かった。

いつものように一人で帰る感覚とは違い、夜に一人で帰るのは心細かった。

「やつぱ、そのまま帰つてれば・・・いやいや！」

独り言をブツブツ言いながら、私は早歩きで家に向かった。すると後ろから誰かが着けてくる様な足音が聞こえた。でもまだ不審者と決まったわけではない。だが、だんだん近づいてくる。

私は走ろうとした。その時、誰かに腕を掴まれた。

「きゃ！」

「うつせ・・・俺だ」

良く見てみると、腕を掴んでいたのは隆矢だった。

「え、隆矢？何してるの？こつち隆矢と逆方向・・・もしかして、

え！私のこと・・・」

「ああ、心配で・・・」

「私のことストーカーしてたの！？な、なんてことを・・・！」

「は！？なんでそうなんだよ！・・・もういいから帰るぞ」

そういつて隆矢は私の腕を掴んで歩き始めた。

ストーカーしていたのかもしれない。だけど、隆矢が来てくれて少し楽になった。

「隆矢・・・ありがと・・・」

私がそういつと隆矢は私の頭を軽くグーで叩いた。

「いた！女の子になんてこと・・・」

「あんま強がん、お前本当は泣き虫で弱虫で、幼虫のような生き物なんだから」

「・・・それ、悪口だよね・・・虫虫虫つて」

こうやつて隆矢と話してられるのも今のうちだ。隆矢もいつかは知恵のことを好きになって、私とは一切話さなくなるだろう。私もいつか隆矢から離れなければならない。

「ねえ、知恵と付き合い始めたの？」

「は？何いきなり」

「今日、自然公園のとき一緒に歩いてたから、もう付き合ってるのかな？って」

私は隆矢の顔を見ると、隆矢は真剣な顔だった。すると隆矢の足が止まった。

「なあ、雪」

「ん？」

「俺、川本と付き合ってみる」

その時冷たい風が木々を揺らした。

第4話 宿泊研修3（後書き）

読んでいただきありがとうございます。
今後もよろしく願います。
ちよつと読みにくかったかな・・・

第5話 後悔してますか？

宿泊研修の帰り道、隆矢は私にこう言った。

“俺、川本と付き合ってみる”と。

「えええええええ！雪、それでいいの！？」

「え？何が？」

宿泊研修の帰り道のことをリナポンに話すと、目を大きく見開いてビックリされた。

「はぁー・・・雪は本当に強がりなんだから」

「え？まあ、強がりって隆矢にも言われたけど・・・」

「雪さ、松田君にもう一生自分のこと構ってもらえないかもしれないんじゃないんだよ？」

私はそのことをちゃんと考えていた。一人になっても寂しくないと、そう自分に言い聞かせて・・・。

「別にいいよ、隆矢は私のものじゃないし。隆矢が何しようと私には関係なし！」

そういうとリナポンは溜息をついた。

「まあ、いいわ・・・雪がいいなら・・・後悔しないようにね！じやあ、バイバイ」

リナポンは私に背を向けて電車に乗り込んだ。私はリナポンに手を振り、家に帰った。

“後悔しないようにね！”

私はリナポンが言っていた言葉が気になったいた。後悔なんてしてない。別に隆矢が知恵と何しようが私には関係ないことだ。

「あ、雪」

前方から隆矢が声を掛けてきた。家が隣だからどうしても顔を見合わせてしまう。私は隆矢を無視して家に入ってしまった。

何で無視しちゃったんだろうって自分でも思う。いつも通り、「隆矢、おかえり」って言えばいいんじゃないのって。そう思いながら

私は家に上がった。

「おかえり、雪」

「ただいま」

家にはお母さんがいた。私には兄弟がいない。だから父、母、私の三人家族なのだ。

私はリビングには行かず、すぐ自分の部屋に行った。すると玄関のチャイムが鳴った。

「あら、隆矢君。雪ならさっき部屋に……」

え？隆矢！？なぜ！？

いきなり戸が力強く開いた。

「うわ！」

私はビツクリして壁に頭をぶつけた。

「いったー……な、何いきなりってさっき会ったばかりじゃん」

「さっきなんで無視したんだよ！」

……あー、あの時のことってさっきの。あれぐらいでまさか訪問してくるとは思っていなかった。

「え、何怒ってるの？いつものことじゃん、無視とかさー」

「あれは冗談とかじゃなかった！まじで無視った！何、俺なんかした？」

なんだか隆矢は真剣に怒っているようだ。顔が怖い。まさかあのくらいでこんなに本気になって尋ねてきて……ありえない。どうしてそこまで？

「別に……何もしてないよ。それにもうさ、話しかけてこないでくれる？」

そうだ。隆矢には川本知恵という列記とした彼女がいる。私に構っていたら知恵に誤解されるかもしれない。幼馴染ってだけでも誤解されているかもしれないのに。

「は？なんで？」

「だってさ、知恵に誤解されたら困るし！隆矢も知恵が隆矢以外の男子と話してたらヤキモチ焼くでしょ？」

「なあ、雪・・・」

「ってことでもう私の家にも来ないで！さ、早く出て行つて！」

そういつて私は隆矢を無理矢理部屋から追い出した。これよかったんだと、これでみんな幸せになるんだとそう自分に言い聞かせた。

もう隆矢と話さないと決めて一週間が経った。学校では隆矢と知恵が付き合っていることが広まっていた。下校の時も隆矢は知恵を家まで送っていたりしたらしい。

そして日曜日。噂では今日隆矢と知恵がデートするらしい。私はリナポンから一緒に遊ぼうと誘われていた。久々に履くワンピース。

「いつてきまーす」

すると隣からも「いつてきまーす」と聞こえた。もしかすると隆矢・・・？私は急ぎ足で駅に向かった。学校で隆矢が話しかけてくるせいで、私は隆矢から逃げているように見えていた。

駅に着いた。私はもう一つ遅い電車で乗ろうと思っていたが、隆矢と会うのが嫌だったので駆け込み乗車になった。私がギリギリに入り、安心できたと思った。だが、私の後ろから隆矢も乗り込んできた。私はビツクリして、隆矢から逃げるようにしてロングシートに座った。

電車の中は私と隆矢だけだった。私はこの沈黙の空気に耐えられず、他の列車に乗り換えることにした。そして立ち上がり、私が歩き出すと隆矢が私の腕を掴んできた。

「ちよつと、離してよ！」

「離さない、なあ雪、逃げるな！十六年間ずっと俺達一緒だったのに避けられていい気分しねーよ」

私は抵抗をやめた。どうして隆矢は私の気持ちを分かってくれないのだろう。どうして十六年間も一緒にいたのに私が考えていることを分かってくれないのだろう。

「隆矢は何も分かってない！私が何考えてるか分かんないくせに！」

どうしてだろう、涙が止まらないのは……。私は隆矢のことをどう思っているんだろう。リナポンが言っていた“後悔しないようにね！”はこのことなのだろうか。でも……

「お前の考えてることなんてわかんねーよ！雪だって俺のことなんも分かってねーよ！何が話しかけてこないでくれる？だよ、なんなんだよ……意味分かんねー」

隆矢は力が抜けたようにロングシートに座った。

あれからずっと沈黙が続き、私はリナポンが待っている三つ目の駅で降りた。

“後悔”

私はこの言葉がずっと引つかかっていた。

駅を出るとリナポンが待っていた。

「あ、雪、早くない？ってどした？目が赤いよ？」

「あー、うん……ちょっといろいろあって、寝不足かな？あははは」

きつとりナポンは気付いていたはずだ。私がさっきまで泣いていたことを……。

私とリナポンは街を歩き回った。そしていつの間にか日が暮れていた。

「あー、もうこんな時間……明日も学校だー」

「う、うん……」

今日一日中、私の顔はどうなっていただろう。リナポンに心配かけないようにしたつもりだった。だけどリナポンとの関係はどんどん深くなっている。だから、私の思っていること分かっているかもしれない……。

「ねえ、雪。今日何かあったんでしょ？松田君に何か言われたとか？」

「リナポン……」

私はリナポンの胸に飛びついた。リナポンは私の頭を優しく撫でてくれた。

「よしよし」

リナポンはとても温かかった。涙が止まらない。やっぱり、正直になればよかったかもしれない。

私はリナポンにすべてを話した。

「そんなことがあったんだー・・・やっぱり雪、後悔しちゃったね」

「・・・うん、でも隆矢の恋っていうか二人を応援したい気持ちはあるよ。だけど・・・」

「うん、わかる。雪はさ、松田君のことどう思ってるの？」

隆矢のことどう思っているのだろう。

「よくわからない・・・特別だとは思ってるよ。十六年間ずっと一緒にいて特別な存在になってるのは確かだと思う・・・、だから隆矢に幸せになってもらいたいって思う」

「そっか」

そうして話が終わったのは六時だった。すっかり暗くなり、リナポンは私を駅まで送ってくれた。

「じゃあ、また明日」

そういつて私は電車に乗った。電車で揺られながら、私は隆矢と知恵のことを考えていた。

第6話 好きより幸せ

季節はもうすっかり夏になっていた。そして夏休み、の前にテストが待ち構えている。私はまあまあ成績も良い。だから中学生のときは隆矢に勉強を教えていた。だけど、今年は教える必要はなさそうだ。今の隆矢には、私より成績のいい知恵という彼女がいるのだから。

テスト一週間前。

「ゆき、教えてー！これだったら赤点取っちゃう・・・それで夏休み追試・・・いやだあー！」

「教える教える、夏休みリナポンと遊びたいもん！」

そうして私は昼休みや放課後、ずっとリナポンと勉強をした。そして同様に隆矢も知恵と一緒に勉強をしていた。

「で、できたー！」

放課後の教室、私はリナポンに出そうな問題をまとめたプリントを渡した。

「お、どれどれ・・・うんうん、できてるよ！」

「やったー！ちよつと自信ついた！ありがとう、雪！」

リナポンの幸せそうな笑顔を見て、私も嬉しくなった。去年までは、ずっと隆矢と・・・。

廊下から話し声が聞こえてきた。

「あの声・・・知恵と松田君？」

「え・・・」

戸が開いた。リナポンの言う通り、隆矢と知恵だった。隆矢とはあれから一度も話していない。

「あ、雪ちゃんと莉奈ちゃん！」と知恵。

「や、やあ・・・」とリナポン。

私は鞆を持って教室を飛び出した。

「え、雪！？ちよつと待ってよ！」

リナポンも私を追いかけて着いてきた。

「雪！」

我に返った私は足を止めた。もしかすると知恵に不愉快な思いをさせてしまったかもしれない。そう思った。

「なんか、意識しすぎて・・・隆矢がいるって思ったら逃げたくなくっちゃうんだよね・・・」

「雪・・・」

そして私は駅へ足を運びながら中学生の時の話をした。喧嘩してたときのことも、夏休みのことも、受験で一緒に頑張ったことも・・・。

「ねえ、雪？雪は松田君のことが好きなんじゃないの？」

「好き・・・？」

私が隆矢のことを？そんなこと一度も思ったこと無い。いや、もしかすると常に好きだったのかもしれない。だけどそれがただの特別と思えていただけだったのかもしれない。

「好きなんだよ！雪は松田君が好き！」

「好き・・・なのかな？わかんないけど、そういうことでいいや」
ノリでこんなことになってしまったけれど、本当のところは分からない。明日は祝日。この土、日曜日が終わればテスト。明日、私の本当の気持ちを確かめに行くしかない！

私、石川雪は松田隆矢の家を訪れることを決意いたしました。そして隆矢の玄関の前にいます。

「といつても・・・何を口実に・・・」

勉強・・・を教えるといつても知恵に既に教えて貰っているだろうし・・・。仲直りするためと言っても、私から言い始めたことだし・・・。だめだ、やっぱり・・・。そう思って家に帰ろうとした。

「あれ？雪ちゃん？」

「あ、隆矢ママ・・・」

私に声を掛けてきたのは、ちょうど買い物帰りの隆矢のお母さんだった。

「うちの玄関の前で何してるの？さ、上がって上がって」

そういわれ私は隆矢ママに家の中へ入れられた。入ってしまったと言わんばかりの出来事が起こっている。今の時刻、朝の十時。隆矢ママは買い物を先に済ませておかなければ気が済まないタイプだった。

「隆矢はまだ起きてないかもね・・・、部屋に入って待つててあげてくれる？」

「あ、はい」

そうして私は恐る恐る隆矢の部屋に向かった。一応ノックをする。

「失礼しまーす・・・」

もちろん隆矢はベッドの上で熟睡中。私は寝ている隆矢のそばに座った。

「・・・可愛い寝顔、久々に見た・・・」

隆矢の寝顔だけは格段に可愛かった。だから中学生の時、隆矢が起きる前に隆矢の寝顔を見ていた覚えがある。もしかすると犯罪？かもしれない。すると隆矢の目が半開きになった。

「あ・・・」

隆矢は私がいることに気付き、目を見開いた。

「うわ！」

もちろんビックリするであろう。起きたら目の前に喧嘩していたはずの人がいるのだもの。

「お、おはよう・・・」

「・・・はよ」

久々に口を利いた。なぜか涙が出てきた。

「な、何泣いてんだよ」

私は隆矢に飛びついた。すごく温かい・・・。

「ちよ、雪」

「・・・めん、ごめん、隆矢。ごめんね」

私はそういつて隆矢から一步離れた。そして二歩三步と・・・すると隆矢が立ち上がった。

「雪、俺さ・・・、昨日、川本と別れた」

「・・・え？」

どういうことだろうか。私の聞き間違いであろうか。

「俺、昨日の帰り道で川本と別れた」

「な、なんで！？あんなにラブラブだったのになんで!？」

「川本・・・俺の気持ち知ってた。俺に好きな人がいるって、ってかその人が誰かも知ってた」

頭が回らない。知恵が隆矢に好きな人がいるって知ってて付き合ってたってこと？というかなぜ隆矢は好きな人いるのに知恵と・・・。そんなんだったら知恵が可愛そうだ。

「ってか正確には振られた？そんな気持ちの松田君と付き合いたくない。本当に私のこと好きになってくれたとき、また私に告白してくれるかな？って言われた」

「あらま・・・でもさ、そんな隆矢の好きな人って分かりやすい人なの？」

「あー・・・、お前には一生分かんねーだろうな」

「ちよつとそれどういう意味！？バカにしてるの！？隆矢より私の方が断然成績いいのに!」

そうしていつの間にか、私と隆矢はいつも通りの関係に戻っていた。隆矢が好きって気持ちはきつと心の隅にある思いで、多くは特別っていう存在なのかもしれない。私は隆矢が幸せになっってくれればいいと思ってる、ただそれだけなのだと。

「で何しに来たんだ？ってか謝りにきただけ？」

「え、あ、うん・・・」

「それだけのために俺を朝早くに起こすとは・・・」

「あ、あ！じゃあさ、一緒に勉強しようか」

「うわ・・・だる・・・ってか川本に散々教えられました」

それでもそれでもいいから・・・。私は隆矢を無理矢理勉強させた。今は特別な関係だけでいい。好きとかそんな感情はいらない。ただ、隆矢と一緒にいれることが幸せで、隆矢が幸せになってくれることが私の幸せにもなっていると思うから。だから今はこのままでもいいんだってそう思っている。

第6話 好きより幸せ（後書き）

一つの大きな章が終わった気分ですねー・・・

これまで読んでいただきありがとうございます。

引き続き「幼馴染との恋は無理ですか？」をよろしく願います。

第7話 やつと夏休みになりました

「はじめ！」

とうとう夏休み前のテストが始まった。隆矢とも仲直りをして、中学の時のように一緒に勉強をした。それがとても幸せで、そして今、問題も解決しすっきりしています。

テストの終わりを予告するチャイムが鳴った。チャイムが終わるまで私は見直しを何回もした。そしてチャイム終了後、みんなの溜息が教室を包んだ。

「終わったー！」

「あー、だめだ・・・絶対追試だー！」

私はいつも通りの感じだった。よくも悪くも無い。隆矢はどうだったのだろう。まあ、知恵に教えてもらっているのでだいたいは出来ているだろうが・・・。

「でわ、終わります。お疲れ様」

そして最後のテストが終わり、下校することになった。

「ゆっきー、帰ろう！」

「うん、来週が終われば夏休みだねー。あ、テストどうだった？」

「これなら絶対大丈夫だよ！雪が教えてくれたおかげだよー、ありがとう」

リナポンは幸せのオーラいっぱいだった。私もそれをみて少し安心した。これでリナポンと一緒に遊びに行くことができるのだ。こういってる私が追試になったら面白いのだけれど・・・。

テストが返ってきて、無事私とリナポンは赤点の科目はなかった。

「なあ、隆はどうだったんだ？」

前から隆矢と宮口君が話しているのが聞こえてきた。

「お、俺・・・この点数・・・」

「え！？何赤点？・・・りゅ、隆が！？隆が九十八点！？」

「え！？」

つい驚きのあまり声が出てしまった。隆矢は大はしゃぎをして皆に見せびらかしていた。私でもそんな点数取ったことが無い。というか百点に近い点数なんて・・・。

するとリナポンが私の耳元で小さくこういった。

「よかったね、松田君追試なくて。夏休み遊びに誘ったら？」

「ちょ、ちよっとリナポン何言ってるの！？わ、私はリナポンと遊ぶんだから！」

「えゝ、本当は松田君と遊びたいくせにゝ」

からかってくるリナポン。でもよかった。もしかすると、と思っていたがその心配もいらなかったようだ。隆矢は隆矢でちゃんと勉強をして成績が上がったのだ。

隆矢が私の方へやってきた。

「雪、ありがと！お前のおかげ！」

「い、いや・・・知恵のおかげでしょ！知恵にもお礼言わないと！」「おう！」

やっぱり自然に話していることがとても幸せだ。この幸せがいつまで続くかわからない。だけどこの幸せが永遠に続いてくれたらいいなと思っている。

いつの間にか夏休みに突入していた。宿題もたくさん出され、計画良く宿題をやらなければ終わらない量だった。突然、携帯電話が鳴った。私は携帯電話を手に取り、電話に出た。

「はい、もしもし？」

『あ、雪？莉奈だけど・・・来週の日曜日さ、一緒に海行かない？』

ついにリナポンと遊ぶ日が来たと思った。

「行く行く！」

『あ、松田君達も誘おうよ！』

「え、隆矢も？」

せつかくリナポンと遊べると思ったのに隆矢も入るとどうなること
だか……。でもリナポンがこういつているのだから誘ったほうが
いいのだろうか……。

『雪も松田君がいた方がいいでしょ！それに息抜きとしてさ！』

「んー、別にいた方がいいわけじゃないけど……。まあ、聞いてみ
るね」

『オツケー、じゃあまた来週！』

電話が切れた。それにしても突然の誘いだった。私は隆矢を誘おう
と隆矢の家を覗った。

「はい？あ、雪。どした？」

「あ、あのね、来週の日曜日に一緒に海行かない？」
すると隆矢は顔を輝かせた。

「俺と雪のふた……」

「宮口君も誘って皆で海へ行こう！」

「は？宮口も？」

「うん！リナポンも！それに皆で行ったほうが楽しいでしょ？息抜
きとして！ね？」

隆矢のさっきの輝いた顔は少し暗くなったが、気を取り直し隆矢は
頷いた。そして用件が済み、私は家に帰ろうとした。

「なあ、雪」

「ん？何？」

「花火大会……」

花火大会。そういえばそんなものがあつた。この花火大会だけはい
つも隆矢と行っていた。でも今年はどうだろうか。もしかすると夏
休み中に隆矢もまた新しい彼女が出来るかもしれないし……。

「花火大会、今年どうする？隆矢、もてるからすぐに彼女出来そう
だからさー……。あ！隆矢好きな人いるんだった。その人といけ
ばいいじゃん！」

「え、いや……。好きな人っていうのは……」

「だからさ、もし花火大会までに私にも隆矢にもカレカノが出来なかつたら・・・まあ、また今度ね！」

あやふやにしたまま私は家に戻っていった。

宿題をしなければならぬという思いもある。だけど海へ早く行きたいという衝動に駆られてしまうのが先だった。とうとう私は限界を超えてしまった。私は宿題を止め、外へでかける準備をした。

「そこらへんうろついてくる！」

といって私は家を出た。もう我慢が出来ず、宿題というものから解放されたかった。そして今、電車の中です。ガタンゴトンと音を鳴らして、電車は進んでいった。特に行先も決まっていけないのに・・・。

私は五番目の駅で降りた。この街は人がよく集まるところだった（よく遊びに来る場所といった方が正確だろうか）。そして私は足を進めた。

一人でこんな大きな街をうろついたのは初めてだった。必ず私の隣には誰かがいた。

「一人っていうのも寂しいものだな」

そう思いながら通りすがりの公園へ立ち寄った。私はブランコに座りゆっくりと漕いだ。

「あれ？雪？」

「へ？」

私の目の前には、二十歳くらいの男の人が立っていた。彼は私のことを知っているようだ。

「えっと・・・」

「忘れた？佐藤だよ、佐藤春樹さとうはるき！小さい頃、お前と隆と良く遊んだんだけど」

私は小さい頃の時の思い出を走馬灯のように駆け巡らせた。

「も、もしかして春君はる！？」

「あ、思い出した？変わってねーな、ははは」

そういえば小さい頃、あれは幼稚園だったろうか、私は隆と五つ離れた春君とで遊んでいた記憶がある。春君も幼馴染のような人だった。家は少し離れていたが小さい頃よく遊んでいた覚えがある。だけど、春君は他県の中学校に通うことになり、私達の前から姿を消した。

春君は私の隣のブランコに座った。

「どうしてここにいるの？」

「いや、戻ってきたんだよ。仕事の都合で」

「そうだったんだ！帰ってきてるんだったら私の家に寄ってくればよかったのに！」

「それがさ、すっかり忘れててさ。今度連れてってよ」

「うん！」

そして私は、久々に再会した春君を家に案内することになった。

第7話 やつと夏休みになりました（後書き）

夏休みに突入しました。海に行ったり、花火大会へ行ったり、いい青春ですね。

そして！ついに新登場人物、佐藤春樹が現れました！やつと春君誕生です（笑）

引き続き「幼馴染との恋は無理ですか？」をよろしくお願いします。

第8話 海へ行きます

春君と会った次の日、私は春君を自分の家に案内した。

「あー、懐かしい！」

「さ、入って入って！」

私は春君を家に入れた。するとお母さんが玄関に駆け寄ってきた。

「春樹君！お久しぶり！大きくなったわねー、さあさあ入って」

久々の感覚だった。春君が私の家が上がってきてお母さんがジュースを出したりしていた。そんな光景が私の頭を駆け巡っていた。

「隆は隣の家だったよな？後で行って見るか」

「うん！私も一緒に行く！」

「もう雪つたら・・・この子変わってないでしょー、あの頃も春樹君にべったりくっついていたわね」

そう、私はあの小さい頃も春君にべったりだった。お兄ちゃんって感覚もあつて、それに好きな人でもあつたから・・・。今でもその感覚は消えてはいない。でも今は憧れという感じだろうか。

「よし、それじゃあ、隆のところにも行くか」

「うん！」

そして私と春君は一緒に隆矢の家を訪ねた。

「へい？・・・え、誰？え、何、雪？え？」

「あー、隆まで忘れてる。佐藤春樹、小さい頃よく遊んだろ？」

「ほら、春君だよ！五つ離れてた！」

すると隆矢の顔が思い出したと言わんばかりの驚いた顔になった。

「春樹か！あー、あの・・・いや、変わりすぎててわかんなかったわ・・・」

「隆も変わったな、男になったんだな・・・でも相変わらず俺のこと呼び捨てなんだな」

確かにあの小さい頃に比べたら私も含め、三人とも成長している。春君は永いこと会っていなかったからよけいにそう思えた。それに

春君はイケメンだし、優しいし、運動神経もいいし・・・あの頃は本当に好きだった。

「ここだったらなんだし、とにかく入れよ」
「そうだね」

そして私と春君は隆矢の家にお邪魔した。すぐに隆矢の部屋に案内され、昔の話をいっぱいした。

「懐かしい」

「あ、今度さ、花火大会あるだろ？それ三人で行かね？」

「うん！行く！うわー、楽しみ！」

「隆も行くだろ？」

そう聞くと隆矢は少し不貞腐れた顔をした。

「二人で行って来れば？」

「じゃあ、春君と二人で行く！」

「俺はいいけど・・・隆、本当にそれでいいのか？俺が雪に何しようとお前はいいいんだな？」

何しよう？私は二人の会話がよくわからなかった。

「あー、もういいよ！行くよ！行けばいいんだろ？」

三人で花火大会に行くことになった。その前に海に行くことになっているのだが。

輝く水面、今、私は海に来ています。

「うわー！綺麗！みてみてリナポン！」

「うん、見てます、見てますよ雪さん！ほら、松田君達もはやく！」
リナポンと隆矢と宮口君、そして私の計四人で海に来た。女子群といっても私とリナポンだけ大はしゃぎをしていた。宮口君はなんとなく苦笑いっぽいが、隆矢はひとつも笑っていない。

「隆矢、楽しくないの？」

「・・・誰のせいだと思ってんだよ！朝の四時に起こされてお前のテンションに付き合ってたこっちの身にもなれよ！こっちは眠

たいんだよ！お前は どうして そんな元氣なんだ・・・」

「だって、この日を待ちに待って たんだもん！」

そういうと隆矢は呆れたような顔をして、浜辺に座った。私がリナポンの方を見るとリナポンは宮口君と何かを話しているみたいだった。

「何話してるの？」

割り込んでいくと、リナポンは驚き

「な、なんでもないよ！さ、行こうか！」

といった。とても怪しい。何か企んでいるのではないだろうかと思えるくらい怪しい。と思いながらも有意義な時間を過ごした。海を満喫した後はやっぱりアイスを食べないと。

「ねえねえ、アイス買いに行かない？」

「そうだね！やっぱり海の後にはアイスだね！」

私達はアイスを買いにいった。

「ストロベリーアイス二つと・・・隆矢達は何にする？」

「俺はバニラで、隆はチョコで」

「は！？何勝手に決めてんだよ！まあ、いいけど」

そしてそれぞれアイスを手にとって、ベンチに座って食べた。

「隆矢、隆矢のアイス一口ちょうだい！」

そういつて私は隆矢のチョコアイスを一口食べた。

「な！お前！勝手に食べやがって！」

「ん、美味しい！」

「松田君、それ食べたなら関節キス・・・」

リナポンが地雷を踏んだ。しばらくの沈黙。溶けて垂れていくアイスクリーム。私はこの沈黙を何とか立ち去りたいと思った。

「わ、私のと変える？私まだ一口も食べてないし・・・」

すると隆矢がこちらを睨んできた。

「誰のせいだと思ってるんだよ！」

隆矢はチョコアイスを私に渡し、呆れたような顔をした。

「俺、いらねーから雪はそのアイス二つを絶対完食するってことで」

「お腹壊しちゃうよ・・・」

「いーから食べ！お前のせいなんだからな！」

無理矢理アイスクリームを食べさせられ、呆気なくお腹を壊すはめになった。

「お、お腹痛い・・・」

「いいざまだ」

「うわ、隆・・・か弱い女の子にそんな・・・」

「は？どこがか弱い女の子？」

ム力つく！神様、この男、ム力つきます！海を満喫できたと思ったのだけれど、最後は苦で終わってしまった。それもこれも隆矢のせいだ！アイスクリームを二つも食べさせだからだ！

電車に揺られながら、私はお腹を押さえ、蹲つずくまっていた。電車が駅に着き、私と隆矢は同じ駅で降り、リナポンと宮口君は後三つ目の駅で降りることになっている。

「松田君！雪をちゃんと家まで送ってあげてね！」

「石川を泣かせたりするなよー」

「うつせ！」

私は隆矢よりも先に家へと足を進めた。お腹を温めるため、早く家に帰りたい一心だった。

「あー・・・痛い・・・」

「お前が無茶食いするから・・・」

私は隆矢を睨んだ。というよりあの時の睨み返しと言っても過言ではない。

「別にこんなの平気だし！じゃあ、さようなら！」
そういつて家へと走って帰った。

第9話 もし・・・

次の日、お腹の痛みも無くなり、私は浴衣を探していた。

「お母さん！私の浴衣は？」

「え？そこらへんにあるでしょ！良く探しなさい」

良く探しても無いから聞いているのだが、と思いながら私はダンスの中にしまつてある服を必死でかき分けながら浴衣を探した。今度は、春君と一緒に花火を見に行くことになっている。あ、隆矢も。だからこそ浴衣を着て女の子っぽく決めて行きたいと思つていた。

かき分けていっているとピンク色の浴衣らしきモノが見えた。掘り出してみると予想通り浴衣だった。もしかすると小さくなつてしまつたのではないかという不安がある。

「あつたー！」

突然家のチャイムがなった。お母さんが玄関に向かう音が聞こえる。

「ゆきー！隆矢君が来たわよ！」

「え？隆矢？」

もしかすると昨日のこと・・・、根に持ちすぎもウザイ。隆矢は当然のように私の部屋に入ってきた。

「なんででしょうか？私に何か用でも？」

「なんだよ、その言い方！心配して来てやつたのに！」

心配？もしかして昨日のお腹が痛くなつたこと？隆矢がそのくらいで家を訪ねてくるとは思えないのだけれど・・・。そこまで隆矢に心配されるのも少し屈辱。

「別に平気だつて言つたじゃん！」

「強がるなよ！お前實際、超超超ちょー弱い人間の癖に」

「そんなに弱くない！別に強がつてなんかいないし！そんな嫌味言いに来る暇があるんだつたら宿題したら？花火大会行けなくなつちやつてもいいの？」

するとお母さんがジュースとお菓子を持って部屋に入ってきた。

「本当に可愛くない子なんだから。隆矢君こんなにイケメンなのにね、こんな子が幼馴染だったら周りから笑われるでしょ？ごめんなさいねー」

「いえいえ、いつも笑われてますから。あはははは」

ム力つく。いつもいつもこんな口喧嘩ばかりしているのにどうして絶交にならないのか不思議でならない。というか、隆矢のどこがイケメンなのやら・・・。

隆矢が帰った後、私は浴衣にアイロンをして、ハンガーに浴衣をかけた。

「よし！準備オツケー！」

これで花火大会に行く準備が整った。そういえば春君のメールアドレスも電話番号も知らない。今度会った時に聞こう。

セミの鳴き声が聞こえる。扇風機に当たっているのに汗をかいている。夏は暑い。猛暑だ。夏は毎日が猛暑だ。そして今、私はとてもなく暇です。

あと少しで花火大会！と思っていてもそのあと少しがとても長い。果てしなく長い。

「暇だ・・・」

私はベッドにダイブし、いつの間にか眠りについていた。

あれ、ここ・・・どこだろう？

「おい」

返事をして返ってこない。周り全てが真っ暗。私一人ぼっち。ブラックホールの中はこんな感じなのだろうか。一人で暗い中を駆け走る。ずっと走り続けても景色は変わらない。私一人だけ。

「おい、誰かー」

「雪！」

すると隆矢の声が聞こえた。だが、周りは真っ暗で何も見えない。

「隆矢？どこにいるの？」

「雪！」

私は三百六十度回転する。だが、誰もいない。すると突然眩しい光が差した。

「雪！」

ハッと目を開けると、目の前には隆矢がいた。

「・・・夢か」

さっきの真つ暗な光景はなんだったのだろうか。周りに誰もいない、そんな世界だった。

「雪、大丈夫か？唸ってたぞ？」

「うん、大丈夫・・・ってなんで隆矢がいるの？」

「いや、暇で暇で」

「宿題は？」

隆矢の顔は一変する。宿題は終わっていないようだ。もちろんこの私は終わっている。花火大会のために全てを終わらせたのだ。

そしてしばらく沈黙が流れた。私はベッドに寝転がったまま、隆矢は扇風機に当たりながら優雅に過ごしているのにどこか虚しい。

「なあ、雪・・・」

「ん？何？」

「俺がさ、好きな子に告白したらどうする？」

「え？何、いきなり・・・告白でもするの？」

隆矢の顔はわりと真剣だった。私は体を起こし、ベッドに座りなおした。

「花火大会の日までにしたいと思ってる」

「へ・・・私はどうするも何も隆矢のこと応援するよ！だってその人との進境とか気になるし！」

すると隆矢は黙り込んでしまった。そしてまた沈黙。今日はヤケに口数が少ない。

「俺がもし、雪を好きだって言ったらどうする？」

「・・・え？何を言っているのだろうか、このお方は。例えばのことだよな？“もし”って言っただけ・・・」

「もし隆矢が私を好きなら・・・、私はこのままの関係でいたいって思う」

「そっか・・・、じゃあ、俺帰るわ」

「え？どうしたの？」

「じゃあな」

そういつて隆矢は私の部屋から出て行った。そして玄関の戸が閉まる音がした。

なんだったのだろう。疑問ばかりが生まれる。もしかして、本当に隆矢が私のことを好きなら、さっきの言葉は禁句だったかもしれない。もしそうだったら・・・。

私はいつの間にか隆矢の家に向かっていた。まあ、すぐ隣だからそう焦ることも無いだろう。

「あら、雪ちゃん。どうしたの？」

「隆矢は・・・」

「あら？隆矢ならさつき雪ちゃんところに・・・」

隆矢は家に戻らず、私の家を出た後、どこかへ出かけてしまったのだ。私は隆矢を追いかけるため駅の方へ向かった。とても、嫌な予感がした。

第10話 どうして？

駅に着いた私は一生懸命隆矢の姿を探した。もしかするともう電車に乗ったかもしれない。私はそう思い、電車に乗り込んだ。休日のせいなのか、電車の中は人でいっぱいだった。「隆矢！」と叫ぶわけにもいかない。私が諦めようとした時だった。電車の中で携帯電話がなった。マナーの悪い人だと最初はそう思った。だが、この着信音は隆矢の……。私は隆矢はこの電車の中にいると確信した。そして一つ目の駅に着いた。すると着信音が消えた。私は隆矢が降りたのだと思い、この駅で降りた。

周りを見渡すが、隆矢らしき人は見当たらない。私は駅を出ながら隆矢を探した。

「隆矢……」

百八十センチメートルの巨大な男……。すぐに見当たるはずなのに……。私は駅周辺を見回った。すると曲がり角を曲がる隆矢の姿を発見した。百メートルくらい離れている。私は走った。

「隆矢！」

曲がり角を曲がった。だが、そこに隆矢の姿は無かった。あの時の夢のようだ。周りに誰もいない。隆矢の声がするのに、隆矢は私のそばにはいない。もし、隆矢が私のそばからいなくなって、二度と会えなくなったらどうなるのだろう。私にとって隆矢は掛け替えの無い存在なのだ。

「隆矢……」

「雪？何してんだ？こんなところで」

目の前にいたのは、隆矢だった。私は啞然とした。

「あ、あれ……隆矢、さっき……」

「え、何？ストーカー？」

隆矢がいることに安心したのか、私は涙が出てきた。

「何泣いてんだよ」

「隆矢が、隆矢がいなくなっちゃったって思つて・・・追いかけてきて、それで・・・隆矢見つけたと思つたらいなくなっちゃつて・・・もし、隆矢がいなくなったら、私・・・」

すると隆矢は私を抱き寄せた。こういうときだけ、隆矢はとても優しい。だから今までずっと口喧嘩しても絶交しなかったのだと思う。「泣くな・・・、そんなブサイクな顔、他人に見せられないだろ？俺は、お前のそばから離れたりしないから・・・、ずっとそばにいてやる」

どうしてだろう。どうして隆矢はこういうときだけ優しいのだろう。私が辛くて悲しい時、いつもそばにいてくれるのは隆矢だった。さすが幼馴染というものだ。

あの後、隆矢と少し街を歩いて家に帰った。

「ねえねえ、なんであの時、突然私の部屋から出て行つたの？」

「え、あー・・・、お前には関係ないことだ！気にするな！」

「ひどい！別にいいじゃん！だから心配して追いかけてきたのに！」

「へーそんなに俺が恋しかったと？」

「そ、そんなんじゃないもん！ホント、ムカつく！」

でも嬉しかった。あの時、隆矢が現れてくれて・・・。もしあのまま隆矢に会えないままだったら、どんな複雑な気持ちでいればよかったのやら・・・。

「あゝ、それにしても明日も明後日も暇だー！花火大会は来週だし・・・」

確かに・・・。待ち遠しい。春君にも早く会いたい。春君に会おうと思つてもメールアドレスも知らないし、それにきつと仕事で忙しいであろう。夏休みといつても春君は社会人だ。もちろん仕事もしている。でも何の仕事をしているかは知らない。まあ、それもこれも花火大会に聞けばいいことなのだが。

「そういえば、雪つて春樹のどこが好きなんだ？」

「えつとカツコイところと優しいところと頭いいところ、運動神経いいところ、っていうか全部好き！でも今はわかんない。好きっていうより憧れ？って感じ」

「へー、じゃあ俺はどんな感じ？」

「隆矢は・・・バカ、アホ、ム力つくし、虫以下」

「え、ひどくね？」

「だけど・・・私が泣いてる時、優しくしてくれる男の子って感じ！」

初めて、口にしていったかもしれない。今日はもしかすると特別な日だったかもしれないから。

隆矢の顔を見ると赤面になっていた。

「何照れてるの？やっぱバカだ！」

「は？誰がだよ！」

「隆矢が」

こんな口喧嘩の日々でもいい。楽しかったらそれでいい。隆矢と一緒にいれるならそれでいい。私はそう思った。最近、こんなことばかり思っている。高校生になって精神も変わったのだろうか。

家に帰ったのは夕方だった。

「ただいまー」

「おかえり」

「夕飯出来てるから、手洗ってささつと食べなさい」

「はい」

今日は私の大好きなカレーだ。作るのは嫌いだけど、食べるのは好きだ。いつかカレーが自分一人の力で作れるようになればいいなと思っている。カレーは簡単ですぐ食べられるというが、簡単と思えるのは主婦の人だけであろう。私にとってカレーは難関な食べ物だと思っている。

手を洗い終え、リビングに足を進めた。すでにカレーがテーブルの

上に置かれていた。

「いったきまーす」

スプーンを手に取り、カレーを口いっぱいに入れた。

今日のカレーはとても最高に美味しく感じた。

第11話 花火の音と供に

華やかに着こなす浴衣に、可愛く決めた髪形。

「隆矢、どう？」

待ちに待った花火大会の日です。

春君から電話があり、祭りが開かれる神社の前で午後七時に待っているといっていた。そして今、午後六時。浴衣を着て準備を始めていた。

「かわいいんじゃない？」

「何その言い方！春君どう思っかな・・・、あゝ、ドキドキする」

「乙女ってやつ？」

隆矢のことは無視をして・・・、でもあの時のことは忘れられない。頭の中から離れない。優しく抱き寄せてくれた、あの温かさ・・・。

「よし！時間もちょうどいい感じだし、もう行く？」

「ああ、そうだな」

そして私は隆矢と一緒に家を出た。

「いつてきまーす」

六時四十分。電車に乗り込んだ。電車の中は浴衣を着た人やカップルが多く乗っていた。突然電車が激しく揺れ、私は姿勢を崩した。すると隆矢が私を引き寄せてきた。

「危ねえ・・・、気をつける」

こういう優しさのときだけかつこよく見えてしまう。

「ありがと」

隆矢は知恵にこんなことをしてきたのだろうか。やっぱり、彼女に対する態度の方がもっともっと優しいはずだ。私なんて下種中の下種ですからね。

「降りるぞ」

電車が目的地についた。ここから神社まで約五分でつくことになっている。

「間に合うかな？」

「まあ、間に合わなくても待たせておけばいい」

「ひどい！そんなことできないよ！さ、早く行くよ！」

そういつて私は隆矢より一歩先を歩いた。

神社の前に着くと既に春君は着ていた。

「あ、春君！」

「お、来た来た」

私は春君に大きく手を振って、駆け寄っていった。隆矢はゆっくりと亀のようにこちらにやってくる。なんだか隆矢は春君のことが嫌いなように見える。

「よし、行くか」

「うん！」

私は春君の隣を歩く。隆矢は私達と少し離れて歩いた。花火が上が
るまで私達は屋台を満喫していた。金魚すくい、リンゴ飴、射的、
輪投げなどいろいろ・・・。やっぱり金魚すくいが一番定番だろう。

「あーヨーヨーすくいしようよ！」

「雪の精神はまだ小さい頃のまんまだな」

「そんなことないよ、ちゃんと着々と大人の階段を上ってるよ」

そんなことを言いながら、ヨーヨーすくいをした。なかなかすくう
ことが出来ない。

「とれた」

と言ったのは隆矢だった。隆矢は前から“すくい系だけ”はとても
上手い。

「すごー！」

「・・・やるよ、俺いらねーし」

「ほんと！？ありがと！」

私は隆矢からヨーヨーを受け取った。水が弾ける音、なんともい
えないくらい夏っぽさを感じさせてくれる。やっぱり、夏は祭りに来
なくてはいけません！

「・・・そろそろだな、花火」

「あ、だったらいつもの場所行こうよ！」

隆矢と毎年来ている絶景の場所。私は春君を案内した。

「ほー、ここなら良く見えそうだな」

すると一発の花火が上がる音がした。花火は綺麗に夜空を照らした。去年と同様、絶景スポットだ。

「綺麗だね、やっぱり花火は最高だよ！」

「あ、俺ちよつとトイレ」

そういうと春君はトイレに駆け足で向かった。すると次は隆矢の携帯が鳴った。

「誰から？」

「え・・・あ、いや、春樹が・・・友達見つけたからちよつと一緒に遊んでくる。絶対戻るからってメール」

「そつか・・・残念だね、一緒に見れなくて」

私と隆矢しばらく二人で花火を眺めていた。鳴り止まない花火の音、綺麗に咲く光。とても綺麗だ。

「なあ、雪」

「ん？」

花火の音で今にもかき消されそうな声。

「・・・だ」

「え？何？」

案の定、花火の音で隆矢の声が聞こえない。私は隆矢に耳を近づけ、集中した。

「好きだ」

・・・気のせいだろうか。花火の音で少し声が歪んだのだろうか。私はそう考えた。

「今、好きだつていった？」

「言った」

「誰のことが？」

「雪のことが」

聞き間違いではないようだ。でも“好き”にもいろいろな好きがあ

るだろう。

「幼馴染として？」

「・・・いや」

すると突然隆矢が私にキスをしてきた。私はすぐに隆矢から離れ、口を手で覆った。何が起ったのかよくわからない。どうして隆矢がいきなりキスなんて・・・。

「りゅ、隆矢の好きな人って・・・」

「雪、好きだ」

時が止まったみたいだった。花火の音も耳に入ってこなくなるくらい・・・。

第12話 そばにいてほしいの・・・

花火の光、音が聞こえなくなるくらい……。

“雪、好きだ”

夏休み、花火大会の日、私は隆矢に告白されました。

あの後、タイミング悪く春君が戻ってきた。私と隆矢が不自然なことを察して、春君はどこかへ行こうとしたが私が引きとめた。ここで隆矢と二人きりになったら、沈黙が続くし、話しかけられない。間に誰かが入ってくれないと関係が壊れそうな気がしたから・・・。

夏休みも終わりに近づいてきた。あれから私と隆矢は一度も話していない。もしかするとこのままずっと話しもできず……。

結局、花火大会の後から隆矢と一度も話す機会はなかった。いつの間にか二学期になっていた。二学期に入って、隆矢と話す機会がまったくなくなった。そうしていると文化祭の時期がやってきた。私のところはお化け屋敷をすることになった。隆矢は実行委員になり、話す機会はどんどん少なくなっていくた。

「ねえねえ、雪」

「ん？何、リナポン？」

「最近さ、雪と松田君が話してるところ見てないんだけど……喧嘩でもしたの？」

「う、うん……喧嘩というより……」

リナポンには説明しようと思った。夏休みの花火大会で隆矢に告白されて、それからずっと口を利いていないと・・・。

「ええええええええええええええええ！」

「シー！」

驚いたのはこっちのほうだ。いきなり大きな声で驚かれて……。まあ、驚くのも無理は無いであろう。

「え、で？返事はしてないの？」

「う、うん・・・する機会がなくて・・・」

「ふん・・・って言うてられないね・・・」

するとリナポンが何かに閃いたようだ。

「松田君！放課後、雪が話しあるって！」

「ちよつと・・・！」

私はリナポンを止めようとしながらも、隆矢の反応が気になり隆矢を見た。

「あー、うん・・・」

やっぱり迷惑だったかもしれない。隆矢はいろいろと忙しいし・・・でもリナポンがせっかく作ってくれた機会なのだ。これを利用しなければ、もう、二度と隆矢に返事を返してあげられないかもしれない。でも返事といってもなんて返すつもりなんだ。私も好きですか？本当に私は隆矢のことが好きなのか？かといって嫌いなわけでもない。隆矢と付き合うとかそういう関係になることが、良く分からないのかもしれない。

「じゃあ、雪、頑張つてね！」

そうしてあつという間に放課後。私は自分の席に座って隆矢を待った。隆矢は文化祭の実行委員だから、先生に捕まっている。

いつの間にか私は寝てしまったみたいだ。

「あ、起きた・・・」

目を開けると、目の前に隆矢の顔が合った。私は顔が熱くなるのがわかった。こんなふうに隆矢を見たことなんて一度も無かったから・・・。

「そんな顔すんな・・・」

すると隆矢は私に背を向けて、窓の外を見た。教室は、私と隆矢の二人だけ。

「ごめんね・・・」

涙が出てきた。どうしてだろう。

「それってどういう意味？今まで俺を避けてきたごめん？今まで俺

の悪口言つてたごめん？それとも・・・俺の告白は受け取れないのごめん？」

何も言い返せない。隆矢のことは好きだけど、でも好きの意味がきつと違うよ・・・。

「隆矢・・・私」

「忘れて。雪は、俺のことを恋愛対象として見たことないだろ？このままずっと幼馴染のままでいたいんだろ？だから、俺が告ったことは忘れてくれていいから・・・じゃあな」

ちが・・・わないんだよね？隆矢の言ってることで合ってるんだよね？

“後悔しないようにね”

「隆矢！待って！」

私は、ずっと隆矢に彼女を作らせてあげたいと思って努力してきた。でも知恵と別れて、私はホツとしていた。それは隆矢がどこかへ行っちゃうような、そんな気が消えたからじゃないの？私は、隆矢にそばにいてほしいって思ったんじゃないの？あの時、ヤキモチやいていたのは私のほうだったんだ。

「隆矢！ごめん！」

「だから、もういいって」

「だけど、そばにいてほしいの・・・。隆矢を恋愛対象として見れないかもしれない・・・、だけど、それでも、私のそばにいてほしいの・・・。隆矢が私のそばから離れちゃうのは嫌・・・。」

すると隆矢は私の方へ近づいてきて、私を抱き寄せた。

「俺、意外と一途だから、雪が俺を好きになるまで俺は雪をずっと好きでいる・・・。」

どうしてそんなに優しいんだろうって・・・。優しいというより、愛？愛なんて言い方はおかしいかもしれない。幼馴染って辛いね・・・。

第13話 文化祭です

文化祭当日。

「ゆきー！」

「お、リナポ・・・」

声的にはリナポンだったのだが、お化けの変装をしていてリナポンなのかよくわからない。それに地味に怖い、地味に。衣装を脱ぐと中身はやはりリナポンだった。

「どうどう？似合ってる？」

「うん、似合ってると思う」

似合ってるかどうかは、はっきりいって顔が隠れているためよくわからない。誰がしても同じことだと思う。なんて本音は言えるわけ無いので、お世辞。

「あ、松田君！これどうどう？」

「おーいいじゃーん。衣装間に合ったんだな」

衣装を作るのは女子の役目だった。かなりの時間を費やしたがなんとか間に合うことができた。隆矢とは少しだけ仲を取り戻したけれど、まだまだ昔のように長話はできなくなっていた。まあ、文化祭の準備やらで隆矢も忙しかった。実行委員でもあるし、周りからも親しまれているから、もっと忙しいのだ。

「ねえねえ、雪・・・松田君との仲は戻ったんだよね？」

「うん、まあ、告白は保留みたいになっちゃったけどね」

「え？どういう意味？」

「なーんでーもなーい。よし、仕事仕事」

隆矢の優しさで、あの告白は保留になってしまったけれど、私の今思っている思いが隆矢には届いたと思う。私も隆矢の気持ちを知ることが出来たし。でもいつかは限界がくるよね？

文化祭が始まって、私達のお化け屋敷は繁盛した。私は受付係をしていた。

「雪ちゃん、交代」

「あ、知恵。ありがと」

相変わらず、知恵はおどおどしている。でも隆矢と別れてからか、少し強くなったような気がする。まあ、そう思っているのは私だけだと思うが・・・。

「雪、そのへん行ってみる？」

リナポンが私を誘ってきた。私は頷き、リナポンと一緒に他のクラスの出し物を見回った。

「お、プラネタリウムだって。カップル専用って・・・あ！見てみて！これ面白そう！」

リナポンが指差したところは、『暗闇ルーム』という意味不明なところだった。しかも二年生のクラス。それに暗闇ルームで何をしろというのだろうか？

「よし、いつてみよー！」

リナポンに腕を引つ張られ、私は無理矢理中に入れさされた。

「うわ、真っ暗・・・」

中は本当に真っ暗で何も見えない。人がどこにいるかもわからない。すると誰かが私にぶつかってきた。

「いた・・・」

「あ、わりい」

男？声的には男っぽい。私、身長が小さいのに巨人に踏み潰されたら・・・。

「り、リナポン・・・？」

返答なし。リナポンはこの暗闇の中を彷徨っているようだ。私は一足早く、ここから出ようとしたがどこが出口かわからない。私はとにかく壁に手を添えて歩くことにした。するとまたもや誰かとぶつかった。

「あ、ごめんなさい」

「あー、真っ暗で何も見えねえ・・・、何これ？」

あれ、さっきと同じ声。それにこの人、私の頭を触ってくる。物だ

と思っているのだろうか。

「私、人間ですけど」

「あ？え、ちっさ！見えないと不便だな・・・」

「小さいとか・・・、まあ、確かに見えないと不便ですね」

するといきなり電気がついた。私は何が起ったか理解できていないように呆然とした。

「おーい、大丈夫？」

「へ、あ・・・」

私とぶつかったのは知らない人。まあ、当然か。というより、かなり身長が高い。

「ぶつかっちゃってすみません。でわ」

そういつて私は教室から出た。教室の外にはリナポンが既にいた。

「あ、きたきた！どうだった？出会いはありましたかね？」

「いや、ないけど・・・ってここ出会い作る場所だったんだ・・・」

「あゝ、だめだったか。松田君とは恋愛対象にはならないって言うてたからさ・・・」

これこそ、よけいなお節介というものだろうか。「リナポンのせいで無駄な時間を費やした」とも言えるはずも無く、私とリナポンは自分のクラスへ戻った。

「あ、おせーぞ」

そういつてきたのは隆矢だった。どうやらもうかなりの時間が経っていたらしい。そして私は受付の交代らしい。リナポンはまたもお化け役を演じなければならなかった。

いつの間にか日は暮れ、文化祭は終わろうとしていた。この学校は仮装行列とかないのだろうか。文化祭、二日くらい続けてほしいものだ。私はそう思う。

文化祭の片付けが終わるとなぜか打ち上げしようということになった。イベントがひとつひとつ終わることに打ち上げするのもなんだが、このクラスで打ち上げするのはこれが初めてなのだ。今回はしかたない。だが、これから打ち上げはどんどん増えてくるに違

いなかった。

打ち上げは、もちろんカラオケ。みんな一人一人歌い、盛り上がり、最後になぜか隆矢にマイクが渡った。

「よしや！明日は休みだから二次会でも行くか！」

おっさんの酒飲みでもないのに二次会。でも学生の二次会もいいかもしれない。カラオケも大盛り上がりで楽しく出来た。このクラスにも慣れてきた。でもまだ、隆矢との関係はどの位置なのかわからないけれど、楽しければそれでいい、幸せだったらそれでいい、私はそう思う。

第14話 冬休みになりました

季節は冬。雪が降り積もっています。

「うー、寒いね」

「うん、それにあと少しでテストだよ」

「あ・・・あゝあ、すっかり忘れてたのに」

「それ、忘れちゃダメでしょ」

リナポンとの関係は、入学式の時よりもっと深くなった。ひとつひとつの出会いを大切にしないとね。それにあと少しで冬休みだ。正月もある。まだ、隆矢は私のことを好きでいるのだろうか。

「松田君と宮口君！おはよう」

「はよ」「おはよう」

隆矢は相変わらず・・・。まあ、ここは言わないでおこう。かなり寒くなり、生徒のほとんどがコートを着て、マフラーをしている。

「拓海、早く教室行こうぜ・・・寒い・・・」

「はいはい、じゃあまたな」

そういえば、高校になったら暖房がついていたんだ。さすが高校だ。中学校には暖房というものがない。これまで三年間耐えてきたのだ。これからは耐えなくて済む。教室に入るとそこは天国のように暖かった。逆に教室から出るのが嫌になる。そんな毎日が続いた。

テストもいつも通り無事に終了した。隆矢は残念ながら赤点をとってしまったが、私は無事に終えることが出来た。冬休みに入り、寒くて家から出られないのが現状で、リナポンと遊びたいと思っいてもなかなか予定が会うことがなかった。それに寒いから、外に出たくないというのも現状であった。

私は遊べない分、リナポンに電話をした。

「あ、リナポン？」

『雪・・・寒くて、コタツから出れない・・・雪、雪降るかな?』

「・・・逆ですか?」

『ごめんごめん』

前からそうだった。“雪”という名前のせいで、冬になるといつも雪(天気の方)が降るから“雪”という名前でからかわれていた覚えがある。

『あ、そういえば、松田君とは上手くやってる?』

「んー・・・、夏休み入ってから隆矢と一度も会ってないんだよね・・・。初詣くらいは一緒に行こうかと思ってるんだけど、隆矢意外とモテルからさ・・・」

『今のうちから誘うときなよ!誰かに奪われちゃうかもよ!』

「でもね、そばにいてくれるって言うてたし・・・」

『そんなの口だけだよ!男なんてね、他の女に移り変わるのは早いんだから!』

そうか・・・。確かにリナポンの言う通りかもしれない。隆矢がずっと私のそばにいてくれるわけではない。他の女に移り変わったら私なんていない存在になるに違いない。隆矢がそんな長期なわけではない!あの人は絶対短期だ!

「よし!今から電話する!じゃあね」

リナポンとの電話を切った後、私はすぐに隆矢に電話をかけた。

『はい?』

久々に聞く隆矢の声。とても寒そうでか細い低い声。

「りゅ、隆矢?あのね・・・は、初詣・・・」

『初詣?何?俺を誘ってんの?』

・・・実際、凶星ですよ。私は何も言い返せなかった。

『まさかの凶星?初詣、毎年一緒に行ってんじゃない。去年だって受験祈願で一緒に行っただろ?覚えてねーの?まあ、雪はバカだからな』

「な!隆矢よりマシだよ!赤点野郎!」

『そんなこと言っているのか?もう一緒に行ってやらねー』

意地悪なところは相変わらず変わらない。でも内心は優しい、はず

なのだ。すると玄関のチャイムが鳴った。

「あ、誰か来た。じゃあね、またかけなおす」

私は電話を切り、玄関へと急いだ。

「はい」

戸を開けると春君が立っていた。

「よっ！暇が出来たからよっただけだ」

「そうなんだ！寒いでしょ、入って入って」

春君とは、あの花火大会以来だ。久々に見るが何も変わった様子は無い。

「あれ、おばさんは？」

「あゝ、パート。お父さんは仕事。で私は冬休みです」

「なるほど」

どうしてか沈黙が続く。時計の針がカチ・・・カチ・・・と音を立てて鳴るだけ。

「雪、あの時」

玄関のチャイムが鳴った。私は春君が切り出した話を後にし、玄関へと向かった。戸を開けると隆矢が立っていた。私は顔が赤くなるのが分かった。

「誰が来たんだ？電話、かけなおすって言ったのにかかって来ないから来て見た」

「お、隆か？」

「あ・・・春樹かよ・・・お邪魔しまーす」

いつの間にかあの花火大会のメンバーになっていた。

「あ、そういうば春君、さっき何か言いかけてたよね？」

「あゝ、大した事じゃないから。気にしないで」

そついわれ、私は気にしないようにした。三人いるのにも関わらず、沈黙。時計の針の音だけ沈黙を遮っているようだ。すると隆矢の携帯が鳴った。

「はい？・・・あゝ、ごめん、無理。・・・彼女と行くから・・・うん、ごめん。じゃあな」

「誰から？」

「クラスの子」

「なんて用？」

「初詣一緒に行こうって。だけど断った」

彼女と行くから・・・？もしかして隆矢、彼女出来たの？私と初詣・・・。

「隆矢、いつの間に彼女出来たの？」

「は？彼女？んなもんいねーよ」

「え？ならなんで彼女と行くからって・・・」

「あゝ、彼女がいるって言ったらだいたい諦めるかなって思って、それに雪と行く約束だろ？」

な、なるほど。それって私が彼女みたいな言い方・・・。

「それって雪が彼女みたいだな」と春君。

私が思っていたことを春君がズバリと言い、私の顔は真っ赤になっていく。さっきから変だ。

「二人って付き合っていないんだ」

「うっせー、お前には関係ねーよ。別に俺は彼女にしていいいけど、雪がどう思ってるかわかんねーからどうにもできねーんだよ」

「へゝ、それ、告白だな」

冬なのにさっきまで寒かったのに急に体が熱くなる。

「私！ココア、作ってくるね！」

そういい、私は急ぎ足で台所へ行った。もう限界だった。顔が熱いきつと真っ赤だろ。私は三人分のココアを作り、一息ついて隆矢たちがいるリビングへココアを運んだ。

「はい、どうぞ」

「サンキュー」

そういつて隆矢は一口飲むと真剣な顔で私にこういった。

「雪、嫌なら嫌ってちゃんと言え。俺が雪を好きでいて、雪が悲しむなら、俺はもう雪を諦めるから」

そういつて隆矢はココアを飲み干して、家から出て行った。

「嫌って・・・何がよ！勝手に怒ってなんでもかんでも！私だっていろいろ考えてるのに！」

「雪？大丈夫？」

春君がいることを忘れて、我を忘れてしまっていた。でも隆矢が言っている意味がわからない。どうしてそんなことをいうの？誰がいつ嫌って言ったのよ！

「もう、嫌！隆矢は本当に私が好きなの？あれのどこがよ！ホント、ム力つく！」

「まあまあ、落ち着け雪。隆矢もあれで雪が大好きなんだ。あいつ昔からそうだからな・・・」

「知ってるけど、知ってるからム力つくの・・・自分が悪いって分かってるから・・・」

もうどうしてだろう。高校生になってからこんなことばかりだ。高校生になってから隆矢との関係はギクシャクし始めた。

第15話 思いは重い（前書き）

決してギャグではありませんので……

第15話 思いは重い

大晦日前日、十二月三十日。家のコタツで優雅に温もっていたけれど、明日は大晦日。いつもだったら隆矢と一緒に神社へ行つて、カウントダウンをするのだが、今年は無理かもしれないと思うとどうしてもジツとしていられない。そして今、隆矢の家の前にいます。私は、勇気を振り絞って玄関のチャイムを押した。

「はい」

中から声が聞こえた。玄関の戸が開く。出てきたのは隆矢ママだった。

「あら、雪ちゃん。隆矢ならまだ寝てるわよ。ごめんね、起きるの遅くて」

「いえ、隆矢が起きるまで待つから」

「だったら入って入って。ココアでいい？」

私は頷き、隆矢ママにさあさあといわんばかりにリビングへと案内された。私と隆矢ママは一緒にコタツの中に入り、世間話をした。

いつの間にか私達の小さい頃の話になっていた。

「もう、こんなに大きくなっちゃって！隆矢なんて大きくなりすぎて困るわよ。それにね、隆矢ね、雪ちゃん以外の女の子、家に入れたこと無いのよ。恥ずかしい話だわ、あははは」

そうだったんだ。初めて知った。あんなにモテる隆矢が私以外の女の子を家に入れたことないなんて。てつきり知恵とか入れているのかと思ってた。そんな話をしていると隆矢が二階から降りてきた。

「おはよう、隆矢。雪ちゃん来てるわよ」

すると隆矢は立ち止まり、私を見る。何かいうのかと思ったら、ガン見したのにもかかわらず、無言で洗面所へ行った。私の脳は怒りマークになっている。私は隆矢より先回りして、隆矢の部屋で待機することにした。隆矢ママには、ちゃんとココアのお礼を言った上でだ。

隆矢が部屋の戸を開ける。

「はあく、何？嫌だつて言いに来たわけ？」

「なんでそうなるわけ？私、嫌とも何も言つて無いじゃん！決め付けないでよ」

何のためにここに来たんだっけ。こんなことを言うため？隆矢と喧嘩するため？本当は違う。「一緒に初詣行こう」つてその一言だけ言いに来たんじゃないの？

「俺、寝ていい？朝から説教聞きたくない。というか寝たいんですけど」

午前十時。隆矢にしてみれば、まだ午前の六時くらいなのだろう。隆矢は布団に潜り込んだ。私はポツンと一人で座っている。そのうち、私もミニテーブルに腕をつけて伏せて寝てしまっていた。

俺が目を覚ましたのは一時間後だった。部屋を見渡すと雪がテーブルに腕をつけて伏せている。そういえば昔も雪がこうやって寝ていたことがあった。

「・・・隆矢・・・初詣、一緒に・・・行こう・・・」

寝言を言っているのだろう。もしかしてこれを言いに来たのだろうか。

「バーカ・・・俺、我慢できなくなるじゃん・・・」

俺は雪の頭をそつと撫でた。いつの間にか俺は雪のことが好きになつていた。昔からよく笑う奴で、その笑顔と優しさに周りの男は雪に引かれていった。でも雪の裏は泣き虫で強がりだつて俺は知っていた。幼馴染だからこそ分かることだ。そんな雪の全てが俺は好きだ。

「・・・隆矢？」

すると雪が目を覚ました。

「私・・・寝ちゃったんだ・・・つて隆矢・・・あれ、私何しに来たんだっけ」

惚けてやがる。たぶん初詣のことだろう。惚ける雪も可愛いものだ。

「お前、寝言言ってたぞ。超不細工な発言」

「ぶ、不細工って私、女の子なんだからね！っていうか、女の子に不細工なんて言っちゃダメだよ！」

「雪、初詣一緒に行こうな」

「え・・・、うん！」

隆矢に先に言われてしまったけれど、一緒に行く約束が出来てよかった。寝ちやう前のことが思い出せないけれど、「初詣一緒に行こう」と言いに来たことだけは確かだ。それに隆矢ともいつも通りになっている。こうやって言い合っている方がいいのかもしれない。でもたまには、喧嘩の無い一日もいいと思う。

「隆矢、私、隆矢のこと好きか分かんないけど、いつか好きになつた日が来たら、真っ先に言いに行くからね。覚悟しておいてよ！」

「は？俺、何十年待たないといけねんだよ」

「そ、そんな何十年もしないうちに決めるもん！」

「へー、じゃあ、楽しみにしておくか」

こんなドキドキもたまにはあつていいかなって思う。あの花火大会のときのようにギクシャクしてる関係じゃなくて、今は軽い感じがいい。隆矢が私を好きでいてくれる思いは重いかもしれないけど、私はいつかその思いに答えてあげられるように今は軽くなりたい。いつかまた、重くなる日が来るかもしれないけれど、その時は深く考えればいいのだから。

「ねえ、隆矢。隆矢はさ、なんで私が好きなの？」

「・・・単刀直入だな。いつの間にか好きになつてた、以上」

いつの間にか、か。私もいつの間にか隆矢を好きになつているのだろうか。でも幼馴染との恋って長続きするとは思えない。相手の全てを知っているから。他人と付き合うなら、いろいろなことが知りたいって思つて、もっと好きになつて行くかもしれない。だけど、

幼馴染はその逆。私は隆矢のことを全て知っている。いや、でも全
てではないかもしれない。隆矢の好きな人を見破れなかったのも事
実。まあ、それは私自身だったから仕方ないかもしれないのだが。

私は家に帰り、嬉しさでたまらなかった。明日が楽しみでしかた
なかった。

第16話 雪降る初詣

十二月三十一日。今日は大晦日の日。私は隆矢と11時に一緒に神社へ行くことにした。神社はいつも花火大会でいつているあの神社。

私は朝の十時から、もう出かける準備をしていた。着ていく服、持っていく物、全て整えていた。

「よし！これでオッケー」

すると携帯電話が鳴った。相手はリナポン。

「もしもし？」

『あ、雪？今日、カウントダウンしに行くよね？』

「うん、隆矢と行くつもりだけど」

『わかった！もしかしたら雪、松田君と喧嘩してて一人でカウントダウンに行くかもって少し思っちゃった。でも安心した、じゃあね！』

そういつて電話は切れた。心配してくれるなんて、ありがたき幸せでもリナポンは誰と行くのだろうか。出会ったら話しかければいいことだけだ。

ついに時間が来た。隆矢が私のところへ来てくれることになっている。玄関のチャイムが鳴る。

「いつてきまーす」

玄関を開けると隆矢が寒そうに立っていた。今日は雪が降っている。私と隆矢は黙々と駅まで歩いた。駅に着き電車に乗る。人が多い。私は身長が低いせいで、押され、なかなか電車に乗ることが出来ない。すると隆矢が私の手を引っ張って、引き寄せてくれた。

「あ、ありがと・・・」

「俺から離れんな、小さいんだから見えねえだろ」

「大きなお世話！別に大丈夫だもん」

「へー、じゃあ俺、もう助けてやんない」

前から思っていたが、隆矢はドSなのか！ム力つく発言ばかりだし、いいこと言った後に余計な一言が混じってるし。まあ、それもこれも昔からののだが。

電車が着き、私は隆矢の手を借りず、出ようとした。だが、なかなか人が多いせいで押される。

「隆矢・・・」

なぜか名前を呼んでしまった。無意識に・・・。すると隆矢に声が届いたのだろうか、隆矢はまたも私の手を引っ張り、引き寄せてくれた。隆矢はこちらを向いて笑ってくる。

「やっぱ、無理だったじゃん、だっせー。神社も人が多いんだから俺から離れるなよ」

「ム力つく・・・」

ム力つくけど、迷子にならないためにも隆矢から離れないようにしなければ。

神社につくとたくさんの人がいた。

「甘酒・・・飲みに行くか」

「う、うん」

隆矢が一步先に進んでいく。その途中、私はいろんな人とぶつかった。いつの間にか無意識に隆矢の服を掴んでいた。

「え、なに？」

無意識のうちに隆矢の服を掴んでいたことに気付き、私は直ぐに手を離れた。

「いや、無意識に、変な意味じゃないからね！」

するとまた隆矢は笑った。

「手、繋いでやるっか？」

「ば、バカにしないで！私だってね、高校生なんだからね！ホント、ム力つく」

「バカにしてねーよ、心配してやってんの。小さいから」

「小さいからいらないでしょ！」

そんなことを言いながら、甘酒を受け取り、温もりを感じる。隆矢と毎年ここに来るのは変わらないけれど、今年はいつもの感じではない。感情がいつもとは違う。それも私達が高校生になって、隆矢に好きだっって言われたからだと思う。

「もう少しで新年だ」

十一時五十分。参拝をするところには既に多くの人が並んでいた。

私と隆矢も甘酒を飲み干して、参拝をするため後ろへ並んだ。

そして「5、4、3、2、1」と共に年が明けた。

「あけましておめでとうございます」

「あけおめ」

「うわ、隆矢軽いよ！」

すると私も隆矢も携帯電話が鳴った。きつとあけましておめでとうメールに違いない。携帯を開くと予想通り、クラスの人からのあけおめメールだった。そうしてメールを見ているうちに私達に参拝する出番が来た。

私と隆矢は一緒に鐘を鳴らし、二礼と二拍手をした後、手を合わせ、願い事をした。

“いろいろあった年でしたが、とても楽しかったです。それと、隆矢のそばにいますように”

私は願った後、一礼し隆矢の方を見た。隆矢は念に願いを込めているようだった。

「何を願ってたの？」

「内緒」

「まあ、言わない方が叶うって言うからね！」

そんな話をしながら、私達はおみくじを引くことにした。

「あ、大吉だつて！見てみて、隆矢！」

そして隆矢のくじを見ると末吉だった。なんて微妙な位置。

「す、末吉でもいいじゃん！大丈夫だよ」

「いいよな、雪は。大吉で！」

大切に持つとかなければ。でもおみくじはただの運だ。当たり外れもきつとある。おみくじが全てではない。おみくじは人生に迷った時の道しるべなのだから。

だんだん人も少なくなってきた、雪も止んだ。

「そろそろ帰るか」

「そうだね」

そうして私達は家へと足を運んだ。帰りの電車は人も少なく、行きとは違い、隆矢の手を借りることも無く電車から降りることが出来た。

「今日はありがと、楽しかった」

「俺も・・・面白かった」

「まだ、バカにしてるでしょ」

まあ、いつもこんな感じ。あと少しで高校一年生も終わり、二年生になる。隆矢は前からもてていたから、後輩から好かれるだろう。私を好きでいてくれるのは嬉しいけれど、隆矢を困らせるようなことはしたくない。いつか、ずっと幼馴染でいたいと言っしかないのだろうか。

第17話 チョコに込められた気持ち

年も明け、冬休みも終わり、いつの間にか二月になっていた。もうバレンタインの季節です。

「ねえ、雪。やっぱ松田君にあげるの？」

「え？何を？」

「惚けちゃって・・・チョコだよ！バレンタインチョコ！」

「あゝ、そうなるね」

リナポンは呆れたような顔をした。毎年あげているバレンタインチョコ。もちろん義理、というより日頃のお礼のようなものだ。

「きつと松田君、いろんな女子から貰うんだろうな」

「だろうね。中学の時、持ちきれないくらいチョコ貰ってたよ。

でも、隆矢さ・・・本命だけは貰わなかったんだよね。告白されて受け取ってって言われたら、ごめんっていつも言ってた」

「うわゝ、勿体無い。まあ、松田君、女より取り見取りだよな」

どうして断っていたんだろうって今さら分かる。私のせいだったことに。それに私より可愛い女の子いっぱいいたはずなのに、その中でどうして私だったんだろうって思う。

「あ、松田君と宮口君、おはよう」

リナポンが二人に駆け寄っていく。私はゆっくりとリナポンのあとをついていく。

教室に入るといつもと変わらない風景。でも、女子の反応が少し変わっているような気がする。さすがに好きな人に告白するチャンスがあと少しで来ると思うと、興奮も止まらないであろう。

「雪、バレンタインの前日、一緒に手作りチョコ作ろうね」

「オッケー」

リナポンは誰にあげるのだろうか。そういえば、リナポンは謎だ。好きな人とか聞いたことないし、新年の時、誰と一緒にいたのかも知らない。バレンタインチョコも誰にあげるのかわからない。また

今度聞こうと思っていても、いつも忘れてしまっていて聞けていない。

「ねえ、リナポン。リナポンは誰にあげるの？」

「ヒ・ミ・ツ」

「・・・」

結局聞いても内緒か。期待して損してしまった。でもそんなリナポンだからこそ、悪い部分も良い部分も見つけられてきたと思う。

そしてバレンタイン前日。私とリナポンは手作りチョコを作ることになった。場所は、私の家。

「よし！作るよ！」

そうして作業に取り掛かった。チョコを細かく切って溶かし、いろいろ間違ったりもして二時間が過ぎた。

「で、できたー！」

仕上がりはなぜかハート型だった。

「え・・・ちよつと」

「これが家族なので、このハート型のが松田君の！」

「え！ハートとかあげたことないんだけど」

「いいじゃん、たまには！はい、包んで包んで」

そういいながらも私はチョコを袋に入れ、リボンで結んだ。

「よし、明日持って行くだけだね」

「うん」

翌日。さすがに朝渡すのはどうかと思い、チョコを持ってリナポンのいる駅に向かった。学校につくまでずっとバレンタインデーの話ばかりだった。

「あ、松田君と宮口君・・・」

二人のもとに駆け寄っていく女子。チョコを持っている。もちろん友達感覚のチョコが多いだろう。この時点では。でもこれから本命

チョコを渡してくる人が増える。隆矢と宮口君の周りが大人しくなったところでリナポンは二人に駆け寄り、チョコを渡した。隆矢は先に教室に行つてしまひ渡す機会を失つてしまつたが、宮口君だけには一応渡しておいた。

教室に入ると甘い匂いが漂つていた。

「あ、雪ちゃん、莉奈ちゃん！はい、これ」

知恵が私達に駆け寄つて渡してくれたものはチョコだった。これが友チョコという名のチョコだ。

「ありがとう」

いつの間にか時は過ぎ、放課後に……。教室には甘い匂いが漂つている。

「隆！呼んでるぞ」

「あ？」

私の耳に聞こえてきた。教室の前には可愛らしい女の子が立っている。私は直ぐに分かつた。隆矢に告白する女の子だかつてことが。

「ねえ、雪。ちょっと見てみようよ」

「え！ちよつと……」

リナポンに引つ張られながらも隆矢と可愛い女の子を追つた。やっぱり本命チョコだ。

「好きです！これ、受け取ってください！」

「ごめん、無理」

「……やつぱり、石川さんのこと好きなんだ。どうして？石川さんより可愛い子、他にもいるじゃん！どうして石川さんなの？」

私が一番聞きたかつたこと、あの子が聞いている。私は無我夢中で二人の会話を盗み聞きした。

「俺は、顔とかそんなので選ばない。あいつは、他の女とは違うんだ」

「何が違ふの？」

「わかんねーけど、俺、あいつの全部好き。誰にもあいつを渡したくない」

。 どうしよう。 こんなにも思ってくれていたなんて知らなかった・・・

「もし、石川さんに好きな人が出来たらどうするの？」

「そんな時は、奪い返す」

「かつこいいこと言っちゃって・・・じゃあ、私と友達になつてよ。それならいいでしょ？」

「おう」

感動のシーンだ。私のせいで振られる人がいると思うところちまで泣けてくる。

「え、雪、どうしたの？」

「なんか・・・、悲しくて・・・」

どうしていいかわからない。隆矢のことが嫌いなわけじゃない。でも好きなわけでもない。ただの幼馴染としてしか見れないんだと思う。

私は結局、隆矢に学校でチヨコを渡すことはできなかった。家に帰り、隆矢の分のチヨコを私に行こうと決めた。直ぐ近くの家。玄関のチャイムを押す。

「はい？」

玄関の戸が開く。出てきたのは隆矢だった。

「あ、隆矢・・・、あのさ・・・」

「まあ、上げれよ。寒いだろ」

「う、うん」

玄関であげて、直ぐに帰るつもりだった。だけど、なぜか勇気が出せなくて結局家にあがってしまった。隆矢の部屋に案内され、隆矢の部屋はチヨコの匂いでいっぱいだった。机の上にはたくさんチヨコ。こんなにも食べたなら、病気になっちゃう。それに私まであげたら・・・。

「これさ、多すぎて食べきれねーんだよ。雪、食べる？」

「食べれないよ・・・、だって、気持ち込めて作ってくれたチヨコじゃん。それに隆矢に向けてあげたチヨコなんだから、私が食べち

「やったらかわいそうだよ・・・」

「あゝ、まあそうだな。で？何しに来たの？」

「え、いや、鼻血出してないか見に来ただけ」

嘘をついてしまった。別に友達感覚であげればいいだけの話。なにどうしてこんなに躊躇うのだろう。どうしてこんなに複雑な気持ちになるのだろう。

「俺、期待したじゃん。毎年チョコくれてるから、今年もくれるのになって。ってか、ヤキモチやいた。拓海はさ、雪から貰ってんのに俺貰えてないから」

「ほ、本当は！チョコ・・・あげようと思って・・・、学校で渡せなかったから・・・」

そういつて私は隆矢にチョコを渡した。隆矢は直ぐに袋を開けた。

「・・・なんでハート型なの？」

「いや、それはね、リナポンが勝手に・・・」

「ふゝん」

そういつて隆矢は黙々とチョコを食べた。

「美味しい・・・意外と」

「一言多い」

でもよかった。チョコを渡すことが出来て。今、私の顔はすごく熱い。冬なのに熱が込み上げてくる。今までこんなことなかった。隆矢には普通に渡せていた。なのに今年は違う。初詣も今までとは違う感情だった。やっぱり、私・・・隆矢のことが好きなのかな？

第18話 新学期早々です

冬も終わり、春。とうとうクラス替えの時期がやってきました。

「うわゝ、どきどきするゝ」

「リナポン、同じクラスだといいね」

「うんうん」

私とリナポンは靴箱前に貼られてある、クラス表を見た。

「私、B組・・・、あ、雪もだ！」

「よかったゝ！」

「あ、松田君達も一緒だよ。よかったね」

そうして新学期が始まった。教室に入ると既に隆矢も宮口君も来ていた。あまり変わってないような気もする。そして私は自分の席を確認し、座った。リナポンとは席は遠くなってしまったが、同じクラスだったことが救いだった。

「はよーっす。お、俺の隣は・・・石川、雪？」

元気の良い奴だ。って思った矢先、その人が隣だとは・・・。すると彼は私の隣の席に座った。あれ・・・良く見たらこの人、あの文化祭の時にぶつかってきた人！

「アアアアアア！」

お互い指差しながら、はもる。

「あの時の！」

「こんなところで再会するとは・・・」

まさか同級生だったとはね。あの時はてっきり先輩かと思っていたが・・・。

「えっと、石川雪ちゃんね。俺、しまねゆうと島崎優斗、よろしく」

「よろしく」

この人も私を小さい呼ばわりした人だ。許せないが、隣の席ということもありながら無視することは出来なかった。すると先生が「並んでー」と呼びかけた。担任はかわらず、にしぐちえい西口小枝子（久々すぎて

わからないかもしれないが)。

始業式も終わり、学級委員も決まり(もちろん隆矢)、いつの間にか放課後。

「雪、帰ろう!」

「うん」

「あ、ちよつと待って、雪ちゃん」

ゆ、雪ちゃん? そう呼び止めたのは、隣の席の島崎優斗。こいつ、意外とチャライです。

「なに?」

「メアド交換しようよ」

だ、だるい絡み! この輝くようなオーラ。眩しい……。私は絡みがだるいので、さっさと済ませるためにメアドを教え、すぐに帰った。

「雪の隣の人、ちゃらいね」

「めんどくさいよ……」

すると携帯電話が鳴った。メールだ。相手は……島崎優斗。

「見なくていいの?」

「あゝ、うん」

今年はどんな一年になるのかな。まあ、この島崎つて人がどんな人がまだわからないし。

家に帰り、携帯を開き、島崎からのメールをみた。

“あ、俺俺、島崎優斗! もしかして俺のこと嫌いになっちゃった?”

好きだった時代がありませんが、と突っ込みたくなるところだがそこは抑えて……。なんとも言えない人種だ。返事を返そうとする。と玄関のチャイムが鳴った。お母さんは今、買い物に出かけていないし、私が出るしかない。

「はい」

私が開ける前に玄関の戸が先に開いた。

「隆矢、どうしたの?」

「別に何も用ないけど遊びに来ただけ」

眉間に皺よつてるし。怒っているのだろうか。

「何？怒ってるの？」

「別に怒ってないですけど」

言い方が怒っているんですけどね。そうして隆矢はなんの躊躇いも無く私の部屋へと入っていった。

「あ、そういうば、メール・・・」

「誰から？」

「あー、島崎優斗って人。あの、隣の席の」
するとよけいに隆矢は眉間に皺を寄せた。

「へー、もうあいつと仲良くなったんだな」

もしかして・・・

「まさか、ヤキモチ？」

隆矢の顔が真っ赤になる。それにつられて私の顔も真っ赤になった。

「冗談でもいいから違うつて言つてよ。凶星とか・・・こつちまで
恥ずかしくなるじゃん」

「だって、事実だし・・・ヤキモチやいてんの」

「別に大丈夫だよ。あんなチャラ男好きになつたりしないから」

「じゃあ、俺を安心させるよ・・・」

え、なに？いきなり隆矢の顔が真剣になった。隆矢はどんどん私の方へ近づいてくる。

「隆矢？」

私は後ろへ後ろへ退けていく。最終的にたどり着いたのはベッドだった。

「俺、安心できねー・・・。雪が他の奴に盗られそうで・・・」

「大丈夫だって！ね？隆矢。私を信じてよ」

すると隆矢は私のことを優しく抱き寄せた。もう隆矢にも限界が来ているようだ。

「俺、雪が俺を好きになるまで我慢できねえよ・・・」

こんなに思いが深くなったのはいつからだろう。隆矢は今までどれだけ我慢してきたのだろう。私はどれだけ隆矢に我慢をさせてきた

のだろう。

「隆矢・・・、目瞑って・・・」

隆矢は言ったとおり、目を瞑った。別に特別な感情なんて無い。でも、好きの意味が違うかもしれないけど・・・、でもね。

私は隆矢に軽くキスをした。そして直ぐに隆矢に抱き付いた。この赤い顔を見せないように・・・。

「え、ちょ・・・何、今の」

「い、いいから！こういさせて！今、顔見られたくないから」

「ごめん、見たい・・・」

すると隆矢は無理矢理私の顔を見てきた。私の顔は真っ赤で少し涙を浮かべた顔。

「やべ、めっちゃかわいい」

そういつて隆矢は私に笑いかけた。やっぱり、好きなのかもしれない。隆矢が・・・好きなのかも。隆矢のそばにいらなくなるのが嫌、それは独り占めしたいってことだね？どうしてキスなんてしちゃったの。こんなんだったら、自分の気持ち揺らいでしまう・・・。それもこれも自分のせい・・・。

第19話 わからない

「雪ちゃん」

来た。チャラ男！

私が隆矢にキスをしてから数日。私は隆矢と顔を見合すたび、赤面になり顔を背けてきた。相変わらず、チャラ男の島崎優斗は、私に鬱陶しい絡みをしてくる。

「メールの返信も遅いしさ、やっぱ、俺のこと嫌い？」

「・・・嫌いかもね、リナポン行くよ」

チャラ男は絡むとだるいので、なるべく避けるようにしている。

「はあ・・・疲れる」

「大丈夫？島君、絡みがだるいよね」

「島君？」

「あー、みんなから島君って呼ばれてるみたいで、釣られて私もみたいな」

島君・・・。そんな可愛い名前をニツクネームにもらえて、チャラ男君は幸せですね。どうしてあんなチャラ男がみんなから好かれるのか分からない。隆矢はまだ明るいし、優しいから分かるけど・・・。

「雪はあんまり島君と関わっちゃダメだよ！雪には松田君がいるんだから！」

「関わりたくないんだけどね・・・」

自分の気持ちもあやふやで、隆矢の気持ちにも答えてあげられていないまま、他の男と仲良くするのは自分でもどうかと思う。あの時、隆矢にあんなことをしたのは、隆矢が可愛そうだったからなのかな。自分からキスしておいて、理由はないなんて・・・。

「・・・雪？」

我に返り、リナポンが私を呼んでいたことに気がつく。

「明日、遊べる？」

「うん」

「どうしたの？何かあった？」

未だ、リナポンには隆矢にキスしたことを言っていない。

「別に何もないよ」

これはさすがにリナポンにも言えない。今までなんでも相談してきたが、こればかりは自分で解決したいと思っている。それにこれは私の責任でもあるから・・・。

駅に着き、リナポンを送ってから、私は家へと足を進めた。あれから家の近くになると隆矢とばったり会いたくないので警戒しながら、家に帰っている。そして私は隆矢がいないことを確認し、玄関に猛スピードで走った。

「雪！」

・・・見つかってしまった。後ろを振り向くと隆矢が立っていた。

「どうして・・・」

「雪が俺のこと避けてるの知ってたから、待ち伏せしてた」

隆矢がどんどん近づいてくる。あの時みたいに・・・。私は隆矢の顔を見ることが出来ない、ただ、顔が真っ赤になっていくことだけわかった。

「こ、来ないで！近寄らないで！じゃあね！」

そういつて私は家の中へ入っていった。隆矢は立ち尽くしたままだ。すると隆矢が玄関のドアを無理矢理開けようとしてきた。私はドアを引っ張り、鍵を駆けるところまで持っていこうとする。だが隆矢のほうが強力な断然力は強い。

「おい！開ける！失礼すぎるだろ！俺は菌か！」

「やめて！」

そしてついにはドアが開いてしまった。私は急いで靴を脱いで自分の部屋へ突っ走った。

「きゃあああああ！」

不審者に襲われているかのように隆矢から逃げる。そして私が階段を上がっているところで隆矢に捕まってしまった。

「離して！ストーカーじゃないんだから！」

「そりゃあ、ストーカーもするよ！避けられてたら気になるだろうが！」

「・・・え、ストーカーしてたの？」

「いや、だから・・・あん時のことが頭から離れねえんだよ・・・」
あの時のこと・・・。私も離れたことは無い。忘れようとしても無理。

「な、なんのこと？覚えてないな」

「と、惚けやがって！雪が俺にキスして、お前の顔がすげー真っ赤で可愛かった・・・っていう・・・」

隆矢の声の音量が小さくなっていった。私の顔も真っ赤だったけれど、隆矢の顔の方がもっと真っ赤だ。

「バカ！そんな大きな声で言わないでよ！恥ずかしいでしょ！」

どうしよう、どうしよう。このまま二人つきりでいたら、耐えられなくなっちゃう。もうどうしていいかわからない。するとなぜか涙が止まらなく出てきた。私は声をあげながら泣く。

「は？なんで泣いてんだよ」

「だって・・・隆矢が・・・、隆矢が好きだけど・・・好きだけど・・・よくわかんないんだもん・・・恋愛感情の好きなのか、わかんないんだもん・・・」

ハッ！無意識のうちに言ってしまった。

「い、今のはなんでもない！聞かなかったことにして！」

私、何を言っているのだろう。隆矢を悩ませないよう言わないように思っていたのに、つい言葉に出してしまった。最悪だ。私が思っていることが隆矢にばれてしまうなんて・・・。

「じゃあ、なんであん時、俺にキスなんかしたわけ？それって好きだからじゃねーの？」

怒ってる。怖い・・・。

「俺、損した・・・。期待してた・・・、あん時、赤くなった雪の顔見て両思いになったのかって思ったけど、そうじゃなかったんだ

な。そう思ってたのは俺だけだったってことか・・・」

隆矢は私から手を離し、無言で家を出て行くようにしている。

「隆矢・・・」

「雪は、あのチャラ男と仲良くすればいいだろ！」

そういい残して、隆矢は家を出て行った。まさかこんなことになるなんて思っていなかった。どうしてこんなことになってしまうのだろう。高校生になってから今まで経験したこと無いことばかり起る。もう、どうしていいかわかんないよ・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7607x/>

幼馴染との恋は無理ですか？

2011年11月9日20時14分発行